

静岡大学

地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

第11号

目次

成果報告書第11号の刊行にあたって	
地域課題解決支援プロジェクトの概要	3
地域課題一覧	
静岡大学×和歌山大学研究フォーラム「半島から広がる可能性」	9
未来社会デザイン機構の取り組みと今後の展開	
わかやま地域連携プラットフォーム構想で紀伊半島の未来創造	
伊豆半島における大学の地域連携の実践と課題	
大学と連携した小規模校における教育DXの活性化	
VUCA時代における半島地域の地方創生	
紀美野町と和歌山大学の地域連携の現状～中田の棚田×LPPを事例に～	
パネルディスカッション	
公開シンポジウム「地域課題解決支援プロジェクトを振り返る」	43
地域連携・課題解決支援の事例報告	
地域課題解決支援プロジェクトとは？	
地域の視点から	
パネルディスカッション	
地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況	57
地域創造教育センターと地域課題解決支援プロジェクト	

静岡大学地域創造教育センター

2026

成果報告書第11号の刊行にあたって

静岡大学学長
日詰 一幸

本学は、今年度で創立から77年目を迎えました。9年前の平成29年に「地域志向大学」宣言を行いました。地域志向という方針は、創立以来の本学の精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性を改めて確認するものでした。本学にとって、地域連携・社会貢献は、これまでも、またこれからも変わらず果たすべき役割となっています。



平成23年度には、地域社会との協働を行う学生・教職員を応援する目的で「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ250件の応募に対し、189件を採択して地域連携を応援してきました。このプロジェクトは、地域社会と学生・教職員との連携活動を応援するものですが、そもそも大学とのつながりを持っていない自治体や地域の団体もあります。そこで、平成25年度からは、そうした地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げました。これまでに県内各地から計44件の応募をいただき、教職員・学生とのマッチングをした上で、課題解決を継続的に支援しております。各種の取り組みの成果が積み上がり、このほど成果報告書第11号を刊行する運びとなりました。

地域課題解決支援プロジェクトの主な担い手は各学部の学生・教職員ですが、初期から参画した静大フューチャーセンター、最近では未来社会デザイン機構、東部サテライト「三余塾」が大きな役割を果たしています。「2030 松崎プロジェクト」「コンパッションタウン」を進める松崎町など、課題が山積する伊豆半島地域において、大学が地域の自治体や企業、地元の高校とも連携し、これからの地域のあり方を考えています。そこで得られた経験と知見は、東部サテライトが伊豆半島ジオパークと共催する「伊豆半島探究学習サミット&伊豆半島ジオパーク学術研究助成発表会」を通じて、伊豆半島全域の方々と共有されました。さらに、同じ半島地域を持つ和歌山大学との共同研究フォーラムも6年目を迎え、「半島地域にみる世界農業遺産の可能性」をテーマに議論が交わされました。また、伊豆半島で行われているグローバル共創科学部の「コラボラティブワークス」も本プロジェクトの成果が結実したものの一つです。

今年度はとりわけ、地域課題解決支援プロジェクトの初期から参画してきた伊豆半島ジオパーク、松崎町、稲取の関係者とともに、プロジェクトに関わった卒業生を招いて「地域課題解決支援プロジェクトを振り返る」と題した公開シンポジウムを開催しました。12年を振り返るとともに、今後に向けて貴重なご意見もいただきました。

大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充し、次なる社会連携につながる循環をつくることを本学は目指しています。今回の報告書で取り上げた種々の取り組みもようやく地域に根付こうとしているところですが、ぜひご一読いただき、ご助言、ご示唆を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をとともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

・ウェブサイト URL : https://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html

・連絡先 : TEL 054-238-4817、E-mail : kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

地域課題一覧

《第1期》

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりい（袋井市）	三川地区の課題は、「三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る」こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組むたい。	① 出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ② 袋井市地域の活性化方策 ③ 地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	① 今後の当市の財政状況分析 ② 公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③ 公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	① 睡眠教育の標準化や効果検証 ② 教育者の育成 ③ 静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	① 農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ② グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③ 大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージキャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功(失敗)事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構 (南伊豆町)	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会施設の複合化案について提案頂き、市民への説明、話し合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会 (伊豆の国市)	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエティブ/ジョブトレーニング事業 (静岡市)	①ニート(若年無業者)増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実態現場+学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスを、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を利活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスを学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町もご多分に漏れず耕作放棄地が増加してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴースタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。
19	浜松都市環境フォーラム (浜松市)	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いにくい空白の分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フェーチャーセンター（静岡市）	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。 三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会（南伊豆町）	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所かあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

＜第2期＞

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会（東伊豆町）	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すすき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター指定管理者（公財）静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。
3	富士のさとの森づくり実行委員会（御殿場市）	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもちて植栽すべきであるとの意見が寄せられている。すでにランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていくことが必要である。	①学生の意見を反映した森づくりのランドデザインの再構築作業 ②ランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言（整備時期、整備内容の決定）

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあったとしても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏(2016年7月)オープンした、シェアオフィス「ふれあいと一ふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度があがるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室がないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例:耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来(菊川市)	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていききたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみよう」と思わせる仕組みの工夫が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 ①地域に求められている居場所とはどんなものか ②それはどのように形作られるべきか ③地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数が多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 ①介護者と要介護者の区分方法 ②適正報酬額の算出 ③団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施 自立援助ルーム 訪問レストランf (浜松市北区)	障害に対しての理解と認知が低すぎ、また障害者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障害者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まず、グレーゾーンにとれくらの障害者が存在しているのか示してほしい。 ②障害者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人 クリエイティブサポートレッツ (浜松市西区)	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたい。一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしたら自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続き、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
16	藤枝市役所	年間150万人の来園者がある蓮華時池公園や日本遺産の旧東海道及びその構成文化財である神社仏閣等を有しているが、周辺商店街への回遊性がほとんどないのが現状である。歴史と文化を核とした地域ブランド力の強化と観光交流の促進、商店街活性化による地域経済力の向上、更には生活環境の改善など総合的な再生を図る。	市が実施するハード事業（公共空間の高質化や景観向上、市有地の整備等）と連動し、「回遊性向上による商店街の活性化」をキーワードに地域ブランディングを図るため、学生の継続的な参画と関わりをお願いしたい。
17	静岡市西部生涯学習センター	近年頻発している豪雨による水害から身を守るためにどのように行動すべきかを学び、水防災を身近なこととして考える機械を提供しているが、座学にとどまっている。	市・国が中心に実施するハード事業と連動し、自分たちで身を守る・地域を守る防災をキーワードに、地域住民の防災力向上に向けた防災フィールドワークの支援をお願いしたい。

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決を一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php

静岡大学×和歌山大学研究フォーラム

半島から広がる可能性

日 時：2025年2月27日（木）9:00～12:15

開催方法：静岡大学農学総合棟201大講義室（対面会場）とオンラインのハイブリッド開催

プログラム：総合司会：辻本侑生（静岡大学地域創造教育センター講師）

（1）開会挨拶 日詰一幸（静岡大学長）

（2）第1部：報告

報告1「未来社会デザイン機構の取り組みと今後の展開」

塩尻信義（静岡大学理事・副学長・未来社会デザイン機構長）

報告2「わかやま地域連携プラットフォーム構想で紀伊半島の未来創造」

本山 貢（和歌山大学長・紀伊半島価値共創基幹長）

報告3「伊豆半島における大学の地域連携の実践と課題」

内山智尋（静岡大学未来社会デザイン機構講師）

報告4「大学と連携した小規模校における教育DXの活性化」

豊田充崇（和歌山大学教育学部教授）

報告5「VUCA時代における半島地域の地方創生」

深澤準弥（松崎町長）

報告6「紀美野町と和歌山大学の地域連携の現状～中田の棚田×LPPを事例に～」

中西円香（紀美野町役場まちづくり課係長）

北 裕子（小川地域棚田振興協議会長）

（3）第2部：パネル・ディスカッション

パネリスト：上記報告者

コメンテーター：岸上光克（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹教授）

阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター特任教授）

司 会：山本隆太（静岡大学地域創造教育センター准教授）

（4）閉会挨拶 塩尻信義（静岡大学理事・副学長・未来社会デザイン機構長）

開会挨拶

日詰一幸（静岡大学長）

本日はご多忙の中、静岡大学×和歌山大学の研究フォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

このフォーラムは、伊豆半島と紀伊半島で展開するさまざまな地域課題に対する取り組みや、地域と大学の新たな連携・協働の事例に学びながら、交流・協働のための拠点やプラットフォームの在り方を検討することを目的として、5年前にスタートしました。

本学と和歌山大学が共催して令和2年度から開催しており、今回のフォーラムは「半島から広がる可能性」をテーマとして、伊豆半島と紀伊半島で展開する大学と地域の連携事例の報告を受け、さまざまな取り組みの成果を互いに学び合うことを予定しています。

ご存じのように、大学は知と人材の集積拠点となっており、大学で研究した成果、大学でのさまざまな教育の取り組みが、地域で具体的にどのように展開していくのかといったことを共に学び合うことは極めて重要だと思っています。

特に今日は、本山学長をはじめ和歌山大学の皆さま、それから和歌山大学と包括連携協定を結んでおられる紀美野町の関係者の皆さまにお越しいただいて、伊豆半島の課題と紀伊半島の課題の共通点や相違点について共に学び合いながら、それぞれの地域振興の在り方に生かしていくことができればありがたいと思っています。

本学は、今日お越しいただいている静岡と浜松にキャンパスがあり、その二つの地域との関わりは非常に密なのですが、これからは伊豆半島を含む東部地域への関わりも非常に大きな課題となっています。とりわけ、先駆的に紀伊半島で取り組みをしておられる和歌山大学の取り組み、そして和歌山大学と紀美野町がどういう形で連携して、どのような成果が上がっているのかを学び合うことは極めて重要だと思っています。

特に和歌山大学の場合、紀伊半島を中心として近年Kii-Plusという取り組みを進めておられますが、そういったわれわれにとってもモデルとなるような取り組みを学ぶとともに、今回のフォーラムでは松崎町から深澤準弥町長をお迎えして、2030松崎プロジェクトのいろいろなご経験をお伺いしたいと思っています。また紀美野町からも中西様、北様にお越しいただいていますので、共に学び合う機会になればと思っています。そして今日は、本山学長もわざわざ遠路お越しいただいていますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。本フォーラムが、今日ご参加いただいた皆さまにとりましても有意義なものになることを心から願っています。

本日このフォーラムへのご登壇をご快諾いただいた報告者の皆さまに厚く御礼申し上げます。これからも半島を抱える両大学がいっそう地域のために貢献し、そこからいろいろな成功事例を生み出すことができればありがたいと思っていますし、そこに関わっていただいている皆さまにも心から御礼申し上げると同時に、今後もいろいろな形で関わりを持っていただくことができますように願っています。

本日のフォーラムが皆さまにとりましても、両大学にとりましても、両地域の皆さまにとりましても意義深いものとなるように心から願っております。本日はどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

報告1

未来社会デザイン機構の取り組みと今後の展開

塩尻信義（静岡大学教育担当理事・副学長・未来社会デザイン機構長）

1. 静岡大学未来社会デザイン機構について

静岡大学は2017年（平成29年）に、地域を志向した大学改革を推進することを「地域志向大学宣言」として取りまとめて公表し、地域社会の価値の創造と持続的な発展に貢献することを目指しています。

実際、私たちは多岐に渡る課題に直面しています。第一に、地球温暖化、生物多様性の喪失など、環境や生活の急速な変化が挙げられます。第二に、水、エネルギー、食料などの資源へのアクセス、また南海トラフ地震やパンデミック等のリスクへの対応といった生存に直結する課題もあります。第三に、平和、健康、教育、雇用など、社会や経済の在り方に関わる重要な課題を抱えています。

こうした状況を踏まえて、静岡大学は未来社会デザイン機構を2020年に設置しました。持続可能な社会とすべての人のウェルビーイングを目標に、多様なステークホルダーと対話を進め、共創的なパートナーシップを確立し、未来社会を共にデザインすることを目指しています。

機構の構成としては、企画推進本部の下に防災総合センター、サステナビリティセンター、地域創造教育センターを配置し、東部地域における教育・研究・産学連携の拠点として伊豆に東部サテライトを設置して、地域連携等の取り組みを重点的に進めています。実際の取り組みに当たっては、未来社会デザイン機構は学内のいろいろなセンターや部局と連携を取るとともに、学外の経済団体、企業、県内自治体等と連携・協働して、共同で地域課題の解決に取り組んでいます。

基本方針として大きく三つ掲げています。一つ目がバックキャストによる未来社会デザインです。活動の目指す先、未来の地域像を地域とともに描くということです。二つ目が多様なステークホルダーとのパートナーシップ、三つ目が分野横断的なチーム単位で持続可能な事業を展開することです。これらをオール静大で取り組んでいます。

実際、県内のいろいろな大学や自治体等と各種連携協定を結び、これを基盤に県内全域で地域課題解決の取り組みをしています（図1）。今日は特に県東部、伊豆地域での取り組みをご紹介します。



図1 静岡県内における未来社会デザイン機構・センターの取り組み

2. 2030松崎プロジェクト

一つ目が「2030松崎プロジェクト」です。このプロジェクトは、松崎町の望ましい未来を町民の方々と歩むために、松崎町、静岡大学、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会の4者協定の下に発足しました。子どもたちと住み続ける町を共につくり、松崎町は観光でも有名な町なので、新しい観光の可能性を目指しています。

実際には、町の次世代を担う中高生、町の未来に関心のある住民によるワークショップを行い、そこに静岡大学の教職員、学生、町外の市民も加わって、対話をしながら10年後の松崎の望ましい未来の姿を描きました。それが「2030松崎ゴール」で、これには13のゴールがあります。

このプロジェクトは、2023年（令和5年）3月に公表された「第6次松崎町総合計画」の基本構想で取り上げられています。「基本姿勢～わたしたちの視点と方法」の4番目に、「2030松崎プロジェクトとの連携～地域内外の多様な人たちとともに」ということで、プロジェクトの考え方や取り組みを入れていただいています。私どもとしては大変ありがたく感じているとともに、さらに松崎町と一緒に総合計画の推進に協力していきたいと考えています。

そういう意味で、町としてのまちづくり、そして大学、松崎町、ジオガイド、観光協会の連携を通した「2030松崎プロジェクト」という2方向から、将来の松崎町のまちづくりに取り組んでいき、理想的には一つのモデルケースとして発展させられればと思っています。

3. 東部サテライトの取り組み

続いて、東部サテライト（三余塾）での活動があります。これについては後ほど静岡大学の内山から報告があるので、ここでは簡単にご説明します。

東部サテライトは、伊豆市の狩野川のほとりにあります。先ほど説明した「2030松崎プロジェクト」を、未来社会デザイン機構の企画推進本部とともに推進しており、他にも「伊豆未来デザインラボ」における企業とのコラボや、高大連携の中での「探究学習サミット」などがあります。

4. 地域創造教育センターの取り組み

それから、未来社会デザイン機構の中に入っている地域創造教育センターでの取り組みです。地域創造教育センターの地域人材育成プロジェクト部門では、大学と地域の連携・協働を推進するため、地域人材育成の支援、地域課題の解決支援につながる各種プロジェクト、ならびに大学開放・生涯学習事業の企画・実施に取り組んでいます。ここでは大きく二つのプロジェクトをご紹介します。

一つは地域連携応援プロジェクトというもので、学内の研究シーズを生かし、教職員・学生から提案していただきます。内容は地域社会との連携を応援するというものです。2023年度には、松崎町に残された歴史文化遺産の展示ポスター制作事業や、松崎町で映画を作る取り組み、鉢窪山麓活性化プロジェクト、「熱海だいたい」の再興に関するプロジェクトなどがありました。

もう一つのプロジェクトが地域課題解決支援プロジェクトです。地域社会が抱える課題を地域の方から応募していただいて、提案された地域課題に対して静岡大学の学生・教職員が地域と協働し、解決を試みるプロジェクトです。2013年に始まり、第1期、第2期で県内から44件の応募がありました。このプロジェクトは大学として課題を受け付けている形ではありませんが、例えば松崎町に関しては、先ほど申し上げた「2030松崎プロジェクト」への展開という形で内容が進化していますし、それ以外の課題解決に関しては公開シンポジウムを開催して、各地域での地域連携や課題解決支援に関する事例報告を行うことで、さらなる連携・協働を進め

ているところです。

5. 静岡大学沼津イノベーションオフィスの開設

そして、東部・伊豆地域での取り組みの一つとして、新たに昨年（2024年）7月、静岡大学沼津イノベーションオフィスを開設しました。これは沼津信用金庫との間で2023年に締結した連携協定に基づくものです。

沼津駅近くに沼津信金が設置したまちづくりプラットフォーム「ぬましんCOMPASS」内に開設し、沼津市をはじめとする県東部地域との産学連携・地域連携を強力に進めるため、これまで伊豆市にあった東部サテライトに加えて沼津市にも拠点を持ち、東部サテライトと一体的に県東部・伊豆地域の地域連携をさらに発展させたいと考えています。

和歌山大学で昨年（2024年）、このフォーラムが開催されたときに、白浜のサテライトで非常に良い取り組みをされていたので、今回の沼津オフィス設置に伴い、そうしたところでの経験等も生かしていければと思っています。またお聞きすることがあると思いますけれども、よろしくお願ひします。

6. 静岡大学未来創成ビジョン

大学全体に関しては、静岡大学未来創成ビジョンということで、静岡大学が向かうべき先について九つの目標を昨年12月に掲げました。これに向かって静岡大学は進んでいくということです。具体的には、

①レジリエント社会の構築、②グリーン社会の構築、③海洋研究の推進、④ソーシャルウェルネスの実現、⑤イノベーションの創出、⑥スマートコミュニティの実現、⑦高等教育機関等との一体的連携、⑧生きる力を支える教養教育改革、⑨県全域への教育研究拠点の展開、の九つです。

特に東部地域については⑨が重点事項となっています。伊豆半島あるいは東部での取り組みはもちろんのこと、県全域との共創、オール静大で、ポストSDGsを見据えた地域課題解決に取り組み、何としても世界に展開できる大学になることが私どもの目標です。つきましては、和歌山大学と共に、半島地域での課題解決のコラボについてはもちろんのこと、他にも連携・協働できる部分がありますので、ぜひ緊密に連携を取り、それぞれの大学、そして半島地域が発展するように進んでいければと思っています。

報告 2

わかやま地域連携プラットフォーム構想で紀伊半島の未来創造

本山 貢（和歌山大学長・紀伊半島価値共創基幹長）

1. 地域連携プラットフォーム構築の背景

本報告では、和歌山県における地域連携プラットフォーム構築の背景と、その将来展望について述べる。静岡大学未来社会デザイン機構の取り組みにも見られるように、地域課題の解決に向けては、多様な主体が連携するプラットフォームの形成が重要な基盤となる。和歌山県においても同様に、産官学金の連携を軸とした地域課題解決の仕組みづくりが求められている。

和歌山県は人口90万人を下回る小規模県であり、県土の約8割を山林が占める。人口は海岸部に集中しており、南海トラフ地震への不安を抱える地域でもある。和歌山大学は和歌山市に所在し、学生数約4,500人の小規模な国立大学であるが、白浜にサテライト拠点を設置し、県南部を含めた広域的な支援体制の構築を進めている。

このような地域特性を踏まえると、伊豆半島と紀伊半島は、人口減少、地域偏在、災害リスク、産業基盤の脆弱性など、共通する課題を多く抱えているといえる。こうした課題に対しては、個別機関による対応ではなく、地域全体を視野に入れた連携の枠組みが不可欠である。

また、Society 5.0の進展に伴い、IoTやビッグデータの活用を前提とした地域づくりが重要となっている。中央教育審議会が示した「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」では、高等教育機関を核とした地域連携の必要性が打ち出され、その後、地域連携プラットフォームに関するガイドラインも整備された。さらに、2025年2月21日の答申「我が国の『知の総和』向上の未来像—高等教育システムの再構築—」においては、従来の枠組みをさらに発展させた「地域構想推進プラットフォーム（仮称）」の方向性が示されている。

全国ではすでに多くの地域連携プラットフォームが整備されている一方で、和歌山県では明確な形での構築が遅れていた。この状況を踏まえ、和歌山大学が中心となり、地域に根差した連携体制を構築する必要性が高まっている。

2. わかやま地域連携プラットフォームの構想

こうした背景のもと、和歌山大学では、地域連携プラットフォーム構想を具体化するため、2024年度に準備室を立ち上げ、2025年4月から本格始動する体制を整えてきた。

和歌山県内には高等教育共創コンソーシアムを構成する大学が11大学あるが、総合大学は和歌山大学のみである。医療系をはじめとする特色ある高等教育機関が存在する一方で、大学数そのものは多くない。そのため、各機関が個別に活動するのではなく、相互の強みを持ち寄り、コンソーシアムとして機能を高めることが重要である。そこで、和歌山大学では、県内大学間の連携の在り方を見直し、コンソーシアムの再構築を進めてきた。

さらに、地域連携プラットフォームの実質化に向けて、産業界や経済5団体との協定を再整備するとともに、和歌山県および県内30市町村との包括連携協定のもとで、地域課題解決に向けた協働体制を強化している（図1）。

和歌山県における最重要課題の一つは少子化と人口流出である。人口流出数そのものは大都

市圏を抱える県より少ないものの、人口規模を考慮すれば、その影響は極めて深刻である。したがって、少子高齢化、人材流出、観光振興、産業振興、防災など、複合的な地域課題に対して、プロジェクト型で具体的な解決策を講じていく必要がある。その実行基盤として、コンソーシアムと

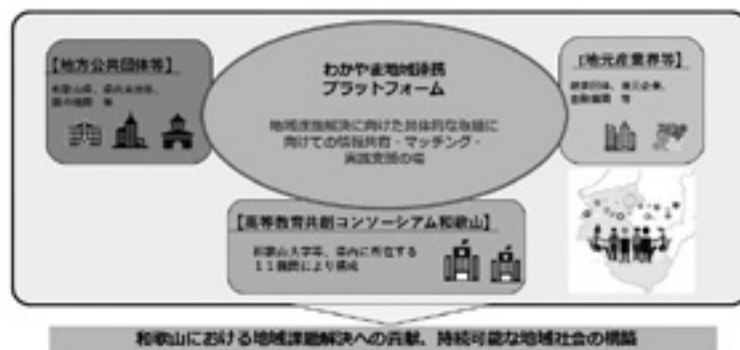


図1 わかやま地域連携プラットフォーム

地域連携プラットフォームを一体的に機能させ、県からの支援に加え、コンソーシアム独自の予算や外部資金も活用しながら、産学官金連携による持続的な事業展開を図っていく構想である。

また、県内各地に高等教育機関のラーニングスペースを順次整備し、共同利用の拠点として活用している。現在は4か所に設置されており、県南部にも拠点を置くことで、学生や研究者が地域に入り、実践的に学びながら地域貢献を行う体制を構築している。特に県南部では学生の往来が少ないという課題があるため、こうした拠点整備は、地域課題解決と人材育成の両面で重要な意義を持つ。

3. 人口減少と地域が抱える諸課題

全国的に人口減少が進行する中で、和歌山県の状況はとりわけ深刻である。県人口はすでに90万人を下回っており、今後20年で57万人程度まで減少するとの推計もある。とりわけ紀南地域では人口減少が著しく、子どもの数の減少も顕著である。こうした状況下で、高等教育機関が地域の持続可能性に対してどのような役割を果たすかが、今後ますます重要な論点となる。

また、人材不足は世界的な課題であるが、日本、とりわけ地方では、より急速かつ深刻に進行している。加えて、産業界は主体性、課題発見力、課題解決力を備えた人材を強く求めており、大学教育に対する社会的要請も高度化している。

国立大学に対しては、今後、定員の見直しや大学規模の適正化が求められる可能性が高い。しかし、地方においては高等教育機関そのものが地域の知的基盤であり、人材育成の中心的存在であることから、単なる規模縮小ではなく、地域の将来像を見据えた機能強化の視点が不可欠である。

大学進学率は男女ともに約6割程度まで上昇してきているが、地域で育った若者を地域の大学で学ばせ、再び地域社会へ還元していく循環を確立することが重要である。若年層の人口流出は地域の将来に直結する課題であり、地域に根差した人材育成と定着支援が急務となっている。

4. 和歌山大学が果たすべき役割

若年層の人口流出の背景には、地域産業界との接続の弱さもある。和歌山県内には大企業が少なく、中小企業が中心であるため、待遇面やキャリア形成の観点から、若者が大阪や東京へ流出しやすい構造がある。県内出身学生の一定数が県外就職を選択し、また県外から入学した学生が県内に定着する割合も高くはない。このような状況を改善するうえで、地域連携プラットフォームは重要な役割を果たすと考えられる。

一方で、和歌山大学は地域貢献とともに、キャンパスのグローバル化も重視している。交換留学等を通じて海外とつながった学生が、学修成果を生かして地域で活躍できる仕組みを整えること、また海外からの留学生を積極的に受け入れ、地域社会と接続することが重要である。日本人学生の海外志向の低下や、地方大学における留学生確保の難しさが指摘されるなかで、高度人材育成を地域と世界の双方に開く姿勢が求められている。

和歌山は関西国際空港に近接しており、国際交流の拠点として高い潜在力を有している。和歌山の産業、文化、歴史、さらには世界遺産といった地域資源を生かしながら、海外から人材を呼び込み、地域の魅力を発信していくことが可能である。また、留学生が地域で学び、そのまま地域企業等へ就職する流れを生み出すことは、地域産業の活性化にもつながる。

現在、和歌山県内の高等教育機関には海外からの留学生が在籍しており、今後はインドやネパールなどとの交流も視野に入れながら、国際的な人材循環をさらに強化していく必要がある。地域に学び、地域に関わり、地域に根付く人材を育てることこそ、地方大学の重要な使命である。

和歌山県における地域連携プラットフォームの整備は、全国的に見れば出遅れた面もある。しかしその分、地域課題を真正面から見据え、産官学金が一体となった実効性のある仕組みを構築する余地は大きい。和歌山大学としては、今後さらにその中核的役割を果たし、地域課題の解決と紀伊半島の未来創造に貢献していきたい（図2）。

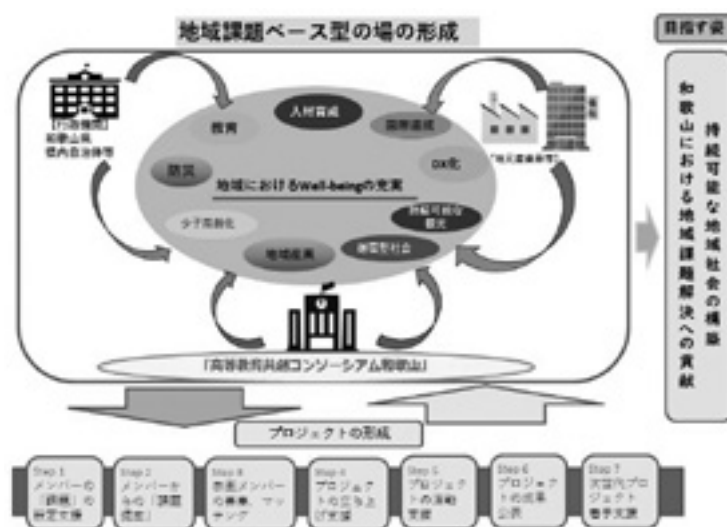


図2 「わかやま地域連携プラットフォーム」の役割

報告 3

伊豆半島における大学の地域連携の実践と課題

内山智尋（静岡大学未来社会デザイン機構講師）

1. 地域福祉に関心を持った理由

先ほど塩尻先生からサテライトについて簡単な報告がありましたが、私からはサテライトで具体的にどんなことをしているのかということと、個人的な構想も含みますけれども、これからどんなことをしていきたいかということをお話ししたいと思います。

まず、簡単に自己紹介をしたいと思います。私は大学に来て3年になりますが、その前は国際協力機構（JICA）で、主に中国をフィールドとしてずっと仕事をしてきました。中国各地でいろいろなプロジェクトを行っていたのですが、最終的に中国も社会保障の問題が深刻で、高齢化率はまだ低いのですが、人口規模があれだけ大きいので高齢者が2億人もおり、社会保障がなかなか整備されない中、これからどうしていくのかが非常に大きな課題になっています。そういうことに関わる中で、私も中国の地域福祉の研究を一つの大きな柱としています。

そのように仕事をしながら、私は福祉に興味関心があったので、通信制の大学に行ったりして研究を続けてきました。大学時代から障害者福祉作業所でアルバイトをしたり、何となく自分の中でも関心が高かった分野で、私の祖母の死が非常に大きかったのですが、幸せな死に方とはどういうことなのだろうということや、最期はみんな地域で死にたいのです。地域で最期まで幸せに生き切ることとはどういうことなのだろうということや、やはり地域福祉が非常に重要なテーマになるのではないかと思います。地域福祉を研究しています。ですので、私の中で中国と日本の地域福祉が大きな柱になって、今ここにいることになります。

2. 東部サテライトの機能

静岡大学の東部サテライトは、元幼稚園の施設の一室をオフィスとして伊豆市から借りて設置し、そこで私と事務職員2人の3人体制で仕事をしています。山本先生や司会の辻本先生なども頻りにサテライトに来てくださり、サポートをいただいています。

サテライトは、「協働のパートナーを見つける場」「学びの場」「情報を得る場・仲間に出会う場」という三つの機能を果たすことが期待されています。これらの機能を果たすためにさまざまな活動を展開しています。

3. 伊豆半島の現状

ここからは伊豆半島の現状について紹介したいと思います。

2014年から2024年の10年間の高齢化率の推移を見ると、伊豆半島が非常に高くなっていて、伊豆半島南部の賀茂圏域は46.6%、熱海伊東圏域では45.8%となっています。後期高齢化率（75歳以上の高齢者の割合）も、賀茂と熱海伊東が非常に高くなっています。

静岡県内の市町村別の高齢化率では松崎町は第3位で、トップ10のうち九つが伊豆半島の市町村という現状になっています（図1）。

高齢化率の問題に加えて、高齢世帯の中でも1人暮らしの高齢者世帯が非常に増えているという問題があります。高齢化世帯のおよそ3分の1が単身世帯になっていて、推計では2040年にはさらに割合が高くなるとされています。

この他にも空き家の問題や担い手不足の問題も生じています。そうすると、防災組織等の互助の活動が困難になることも想定されます。そして、公共交通の維持・確保が困難になってきます。運賃の値上げや減便、撤退もあり得るので、こうなると買い物が困難になる世帯も増えますし、移動が困難になる人たちも多くなるわけです。

また、県が2019年に実施した調査によると、若者が転出するきっかけは「大学進学」が58.1%と最も多く、「就職」が続いています。若者が就職時に戻りたくないと思う理由では、「やってみたい仕事や勤め先がなかった」が41%と最も多く、「給与水準の高い仕事があった」が27%と続きます。

県が2020年にひきこもりについて行った調査を見ると、私は地域の民生委員がひきこもりの人を把握していると思っていたのですが、実際のデータでは、東部地域で民生委員が把握していると答えた回答は20%に届かないのです。ということは、把握されていない人たちが80%ぐらいいるということであり、把握し切れていない現状が浮き彫りとなっています。

どんな人がひきこもりになっているかということ、東部地域では男性が多く、高齢者が多いのではないかと思いがちですけれども、実は40~50代が多いという結果も出ています。こうした人たちに対して、民生委員や地域の人もどう接触したらいいかわからず、ごみ屋敷になっているような家庭とどうやって交流すればいいかわからなくて非常に困っているという現状があります。

これ以外にも、一般によくいわれる子どもの貧困の問題やヤングケアラーの問題、孤立・孤独の問題はどここの地域にも同じようにあると思いますし、福祉のニーズが多様化・複雑化しているといえるでしょう。一方で、これまで予防的な役割を果たしてきた地域でのつながりが非常に弱体化しているともいえます。

これからは、人口減少や高齢化が著しい地域でどうしたら暮らし続けていけるのかということを考えていかなければなりません。地域を支える活動も必要ですし、暮らしのための拠点も必要です。防災のことも含めて、必要なサービス機能を維持・確保するためにはどうしたらいいのかということが非常に大きなテーマになってくると思います。

一方で、伊豆半島には非常に豊富な地域資源もあり、「美しい伊豆創造センター」という日本式DMO（観光地域づくり法人）が、「ジオの恵み 住む人来る人に」をスローガンにいろいろな戦略を持って活動しています。

われわれ大学も協定を結んでいます。伊豆半島にはジオパークがあって、ジオスポットがたくさんありますけれども、そのことについてみんなで歴史学、社会学、人類学、地理学などいろいろな切り口で学び、大事に守っていきながら、しっかりと活用するという循環で、地域資源を生かしながら地域振興を図ることを目指しています。これに対して大学も、いろいろな協

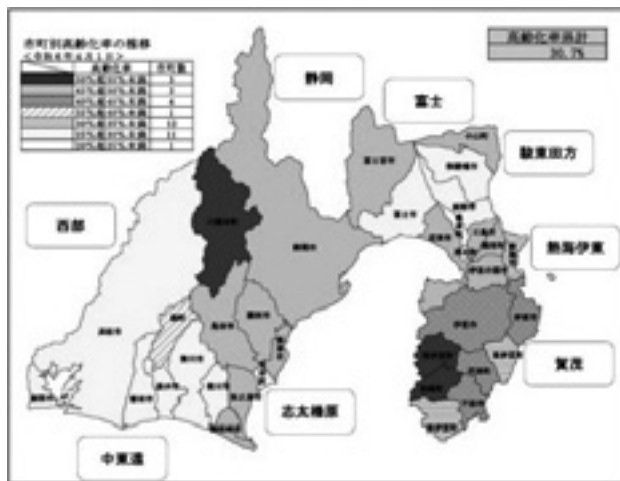


図1 静岡県の高齢化率(令和6年(2024年))
 出典:「高齢化率の公表(令和6年度静岡県高齢者福祉行政の基礎調査)」健康福祉部

定に基づいてさまざまな活動をしています。

4. 東部サテライトの主な活動

では、東部サテライトがどんなことをしているかというと、先ほど三つの機能を果たすことが期待されていると述べましたが、「協働のパートナーを見つける場」として、デザインラボを活動の一つとして挙げました。月に1回、静岡県内のいろいろな企業が集まって情報共有をしたり、特に地域に焦点を当てた新しい取り組みを紹介し合って交流する活動をしています。これを通じて企業同士のコラボレーションが生まれたりもしています（図2）。



図2 伊豆未来デザインラボ・セミナー

昨年度は伊豆半島の13市町村の首長に声をかけ、地域の話をしてくださいとお願いしたところ、実際に松崎町の深澤町長にも話をさせていただきました。

「学びの場」としては、野鳥観察やクマムシの観察、石器の見方を学ぶイベントなど、大学の先生方に来ていただいて子ども向けのイベントを実施しています。社会人向けの公開講座としては、今年度は「多彩な視点から学ぶ伊豆半島の自然と社会」をテーマに講座を開いています。

「情報を得る場・仲間に出会う場」としては、サテライト近くの青羽根・柿木地区の住民有志が集まって、自分たちで古文書を持ち寄って解読したり、実際に近くの狩野城にフィールドワークに行き歩いてみたりする活動をしています。それから高校生探究学習サミットを来月初めに修善寺というお寺で開催し、伊豆半島の高校の探究学習の成果を発表して交流する場を設けています。ここにも大学の先生や学生が関わって、まち歩きなどのイベントも企画しています。

2030松崎プロジェクトに関しては、サテライトが事務局を担当しています。先ほど紹介がありましたけれども、子どもたちと住み続ける町を共につくること、新しい観光の可能性を追求することという二つの柱を掲げ、まずは2030年の松崎町をどんな町にしたいかというゴールをワークショップを通じて設定し、それに対してチームを結成して活動しています。17のチームがあるのですが、すべての活動がうまくいっているわけではなく、最初は立ち上がったけれども活動が継続しないという課題もあります。その点をこれからどうしていくかということを考えなければいけない段階に来ていると思っています。

「ぷらっとカフェ」というカフェを月に2回開いていて、そこがわれわれ松崎プロジェクトのプラットフォームのような形になっています。そこにぷらっと行って何か相談したり、今年度・昨年度は勉強会を開いたりもしています。そうしたことを通じてチーム同士の連携が進んだり、外部の人との情報共有が進んだりして、さらなる展開が進めばいいなと思っています。最近は松崎高校の探究学習とも深く連携して活動しています。

私自身は現在、「ふるさと絵屏風」というものを松崎町で作っています。高齢者から昭和20～30年ごろの松崎のお話を聞いて、それを絵屏風にするというものです。絵屏風にすることが目的ではなく、これを通じて子どもたちとの多世代の交流機会が多くできたり、知恵や技が継承されていく、過去を育てて未来を育むという目標を掲げています。この活動は元々は滋賀県立大学の先生が進めている活動ですけれども、非常に素



図3 ふるさと絵屏風の制作（松崎町）

晴らしいと思って、12月に先生方を松崎町の旧依田邸にお呼びし、セミナーを実施しました。神奈川県葉山町の絵屏風は4畳分ぐらいの大きさがある、すごく迫力があります。これを学校などに持って行って、高齢者が語り部となって子どもたちに地域のことを語り継ぐ活動をしているのです。

ジオパークとの連携も進めています。2022年に伊豆半島ジオパーク推進協議会と包括連携協定を結び、イベントや書籍『ジオパークからはじめる地域づくり・人づくり』の出版、ジオガイド養成講座などでさまざまな連携をしています。ジオパークにいる3名の研究員が静岡大学の客員教授を務めているので、その方々と静大の教員のコラボレーションもこれから進めていければと考えています。

学生のフィールドワークに関しても、伊豆半島では主に山本隆太先生のところのサステナビリティアクションの活動と私のところの地域福祉の活動の二つが展開しています。フィールドワークを通じて、学生たちを伊豆半島のいろいろな地域にもっと連れていきたいと思っています。

5. 今後の展開

これからは私たちが暮らす地域にもう一度目を向けて、そこにある自然、生物の多様性、歴史・文化を見直すところにサテライトとしてももう少し力を入れられないかと考えています。

私は福祉が専門なので福祉の視点から見ると、福祉は個別の問題からそれをどうやって地域の課題として認識し、地域課題の解決のためにみんなでどうするかということを行動につなげていくわけです。今は地域創生の活動でまちづくり・地域づくりといったことがいわれているので、そうした興味関心から始まるまちづくりと個別支援から始まる地域福祉をどうつなげていくか、融合させていくかということが、私の中でも一つのテーマになっていて、これをどのように実践していこうかと考えています。

地域の発展は個人の成長・発展と車の両輪であり、どちらも欠かせないものだと思うので、どういう人たちがこの場に参加して、互いに刺激を受けながら個人が発展・成長し、それがシステム・制度にどうやって反映され、地域と個人が共に成長していけるのか、そのためにはどうしたらいいかということを考えていきたいと思っています。

サテライトとして三つの機能を果たすために今後もいろいろ活動していくわけですが、これから重要なことが二つあると私は思っています。

一つは、教員の継続的な関わりです。伊豆半島に対して研究テーマを持ち、長期的に研究で関わってくれる先生を探してつなげたいと思います。

もう一つは学生のフィールドワークです。昨年（2024年）12月にインドネシアに行く機会があり、そこで現地のフィールドワークの授業を見たのですが、すべての学生が50日間、現地に住み込みでフィールドワークとして入るのです。その前に事前学習として地域のことを調べ、50日間はフィールドワークで現場に住み込んで活動し、終わった後はフォローアップとしていろいろな形で関わるのです。大学として学生と地域との連携にもものすごく本気で取り組んでいる姿を見て、非常に感銘を受けました。静岡大学でもこういうことができないかと思っています。サテライトとしても、学生が伊豆半島に来られるようにこれからも最大のサポートをしていきたいと思っています。

先ほど言ったように、地域のエンパワーメントと住民のエンパワーメントの両方が必要であり、学びの場を引き続き提供していくこと、プロジェクトの実践の場があることはとても大事だと思います。松崎町のプロジェクトが一つの場でもありますけれども、もっといろいろな場

があって、そこに民間企業などいろいろな方が参加できるような場をもっと提供していきたいと思えます。

サテライトの今後の構想として、サテライトミュージアムがあります。今あるサテライトオフィスの空き部屋を活用し、伊豆半島の研究をしている先生方の成果物をそこで展示したり、子どもが学校帰りに気軽に立ち寄って顕微鏡をのぞいたりできるようなオープンな場をつくりたいと考えています。

ジオパークと福祉の連携として、今度「ジオ福連携研究所」を立ち上げたいと思っているのですが、自然の健康、地域の健康、人の健康という三つのコンセプトでいろいろな人が関われるような場を提供していきたいと考えています。

報告 4

大学と連携した小規模校における教育 DX の活性化

豊田充崇（和歌山大学教育学部教授）

1. 和歌山県教委と教育DX連携協定を締結

私からは、小規模校における教育DXの活性化について、和歌山県内の各自治体と連携した事例をお示ししたいと思います。

まず、和歌山県は全域が半島の一部であり、とにかく山地が多くて交通の便が悪いという事情があります。全域に小規模校が広がっていて、統廃合が進む中で、複式学級が多いという特色も持っています。

その中で、和歌山大学は2023年に和歌山県教育委員会と教育DX連携協定を締結しました。それまでも連携してきたのですが、正式に協定を結び、地域教育の活性化、教育DXの推進、ICT活用教育の研究・人材育成などで連携していくことになりました。

その重要な成果物として、「きのくにICT教育」というICT教育の指針を示したものがあり、小中高校のプログラミング教育の学習指導案などを共同開発しています。

具体的には、和歌山県に特化したものを和歌山大学と連携して開発しているので、プログラミングの事例にかなり特色があります。例えば、地域の特産物をテーマにしてみんなが遊べるゲームを作るなど、単にプログラミングの授業を実践することが目的ではなく、それを通して児童生徒が地域に親しんだり、地域の特色を学んだりできる内容にしています。

例えば、和歌山県が日本一生産量の多い柿を題材にしたゲームをプログラミングで作る授業があります。これは結構昔からやっていて、紀美野町で実施した事例をプログラミングサイトに置いて実際に遊べるようになっていました。応用編としては、紀伊風土記の丘で作った埴輪を基に、埴輪キャッチゲームを作る授業があったりして、地域それぞれの特色に応じてアレンジを加えています。

もう一つ大きなものが、県教委と和歌山大学が共同開発した情報活用能力の指標です。これは小中高校での指導事項が県によって共通化されている点が非常に大きな特色です。これによって和歌山大学も、この指針に沿って県内の学校を支援しやすくなっています。簡単に言うと、大学と連携した県内の先進地域で、先導的にICT教育の実践事例を開発し、それを県教委に提案して、正式な事例として県内の学校に普及します。そのお手伝いを和歌山大学が行います。県内で統一された情報活用能力の一覧表となっており、原則としてプログラミング教育のカリキュラムも統一されているので、このあたりを支援できたことは大きいと思っています。

2. 和歌山大学の学校教育支援

次に、和歌山大学における組織体制ですが、次世代の学校支援と学習のためのアクティビティスペースとして「さらさ (SALASA)」という専用の部屋を学内に設けています。ここでは主に学部生や院生、他学部生のICT教育をサポートするとともに、例えば県内で使われているプログラミングキットやタブレット、もしくは最新の教育機器等の貸し出しを一元的に行っています。

さらに教育学部附属小学校では、恐らく日本で最長だと思うのですが、今年（2025年）で第17回を迎えたICT活用授業の研究会を実施しています。まだ教室に無線LANすらなかったICT教育の創成期から継続して行っています。この研究会では、普及推進の授業モデルと先導的な最新事例をそろえ、毎年県内外から多くの先生方を集めています。

教育学部の学校実践支援ユニットでは、県内の自治体から教育DXに関する委託事業を受けています。今はまだ海南市と田辺市の2地域だけですけれども、その中にさらに3校程度の教育DX推進校があり、そちらを年間を通じて支援しています。

例えば、ミカン畑の中にある田辺市立大坊小学校は保護者の9割が梅・ミカン農家なのですが、完全複式校で、先生が他の学年に教えに行っているときには児童だけで勉強しなければなりません。そうしたときにICTを活用して、つまり先生による直接指導ではなくて間接指導をうまく使って教育効果を上げるための手法を集めてフィードバックすることがわれわれの役割となっています。

田辺市では、和歌山大学の編集協力により、教育DXの研究だけでなく教育現場に広く普及推進するための方策についてまとめたリーフレットを作成しました。こういった支援も大学では行っています。紀の川市でも現在、リーフレットの作成を和歌山大学との連携の下で行っています。

それから、これも大きな特色だと思うのですが、学部生や大学院生が教育実習を行うときや、もしくは要請に応じて、プログラミング教育等のICT活用の出前授業を実施しています。具体的には和歌山大学が小学校で遠隔授業を行っていて、遠隔授業自体はそれほど珍しいことではないと思うのですが、大学院生がサポートしているのです。先ほどの「さらさ」という部屋でリモート授業の方法やプログラミング授業の方法、デジタル教科書の有効活用などを学んだ学生が、現場で実習段階から授業をサポートし、場合によってはICTを活用した先進的な授業を実践しているところがポイントになっていると思います。

3. 県内自治体からの委託事業の実施

県内自治体からの教育DXに関する共同研究の依頼もあります。自治体は、とにかく情報化推進でまちづくりを進めたいですし、ICT教育を実践して町内から優れたIT人材の輩出を目指しているのです。このあたりの支援を行っています。

例えば、紀美野町との連携事例では、他にはなかなかないようなAR地球儀、3Dプリンター、VRゴーグル等の活用に協力しているほか、eスポーツ、Vチューバーといった特色ある講座を開き、教育現場にノウハウのないものを共同開発していくことに取り組んでいます。

紀美野町ではICT教育を通じて子どもたちの郷土愛を育む特殊なアプローチを掲げていただいております。町の担当者の方からは、「地元に着した和歌山大学が入ってくくださったことで、関係者の理解が得られやすくなった」という評価をいただいております。

もう一つ、最新のニュースをお届けしたいと思うのですが、紀美野町の野上中学校では、ARを利用した授業や多目的教室の新設などを共同で行っていて、他の自治体にも空間の特性や今後の活用方法を見てもらおうと2月に公開授業を実施しました。STEAM教育という名の下に私自身が授業を行い、新たな事例を県内に示しました。このあたりも共同研究だけで終わるのではなく、やはり普及推進して、先生だけでなく児童・生徒にも届くような取り組みは特色があるのではないかと考えています。

今は3Dモデリングを3Dプリンターに出力したりといったことも授業で行っています。生徒たちのポテンシャルはものすごく高いです。3Dモデリングのようなアプリを通常の授業で使う

ことはないので、こういったアプリの最新モデルを提供できたらと思っています。

県教委と連携を深めてICT教育の指標を共同開発し、それを基に山間部であっても沿岸部であっても同じ目的を持ったICTの教育DXを振興できたことは非常に大きいと思います。これは現場にも浸透し始めていて、和歌山大学と共同開発した県教育委員会の情報活用能力一覧表を基に、各学校でもICT教育の計画に盛り込んでいただいております、それを学生やわれわれが支援するような循環的なものが出来上がっていると思います。

報告 5

VUCA 時代における半島地域の地方創生

深澤準弥（松崎町長）

1. 松崎町の概要

静岡県伊豆半島の西南部に位置する松崎町から参りました深澤と申します。私は元々松崎町役場の職員で、いろいろな課を渡り歩いた後、現在の立場に3年前に就きました。地元ではいろいろな団体に関わっていて、まちづくりを個人的にもいろいろと行っています。

毎日早朝から松崎海岸の浜掃除を行っていて、最初は自分と先輩の2人でやっていたのですが、多くの方々が私たちに巻き込まれて参加者が増えています。それから、地域住民が集えるようなイベントも行っていて、10年ほど前に盆踊りを32年ぶりに復活させたこともあります。港にキャンドルを置いて、日が落ちて以降のにぎわいづくりをしたり、放置竹林を活用していかだを作り、海の上に遊び場を作ったりもしました。

松崎町は、静岡県内で人口が最も少ない自治体です。産業もなかなか大きいものがなく、財政規模も極端に小さな町です。高齢化率は直近の数字が50.7%で、静岡県内では3番目に高くなっています。

2. VUCA時代とは

VUCAの時代というのは、皆さんご存じでしょうから詳しくは話しませんが、社会がいろいろな形で変容していて、今まで誰も経験したことがないような時代の流れになってきています。そうすると予測が難しくなり、いたずらにみんなが不安を持ってしまったり、諦めたりするようなことが起こりつつあります。

新型コロナも不確実な要素の一つでしたし、海外との複雑な関係性もそうで、海外で戦争が起こったことが自分たちの日常生活を直接脅かすような事態が起きるほど、グローバル化が進んでいます。それから、マーケットもそうですが、消費者の価値観の変容によって、何が売れて何が売れないのかといったことも予測が非常に難しくなっています。

3. 半島地域の特性と問題

半島地域の特性としては、基本的には三方を海に囲まれて平地に恵まれないことが挙げられ、松崎町も8割以上が中山間地域となっています。半島循環道路の整備は依然として格差が残っており、半島としての規模は異なりますが、紀伊半島も同じような課題が共有されていると感じています。半島地域では地理的な条件不利性から、いまだに多くの課題が残されている状況が続いています。

去年（2024年）1月に能登半島が地震に見舞われました。伊豆半島も紀伊半島も、これから想定される災害を非常に懸念しているところです。しかし、伊豆半島には高等教育機関がありません。そこで、静岡県で唯一の国立大学法人である静岡大学さんと連携を模索していたところ、つながりをいただきました。

日本が人口減少・縮小社会に向かっていることは皆さんご存じのとおりだと思います。江戸

時代以降、近代化に伴って人口はどんどん増えてきましたが、令和の今、人口減少・高齢化が進み、江戸時代と同じくらいの人口数になっていくのですが、人口構成がまったく異なる状況となり、歴史を振り返ってもなかなか不確実な未来予測になっていくと考えられます。

限界集落の増加が進み、地方が消滅していくわけですが、本当に痛感するのは、いろいろなところで人がいないということです。地域は今までどおりでは絶対に成り立たないということが考えられます。

新型コロナによって拍車がかかったのは、地域コミュニティの衰退や人と人とのつながりの希薄化です。実は人がたくさんいると、つながりがいくら生まれるのですが、分母が減れば減るほどつながりにくくなる現象が人間社会では起こります。公共交通の衰退や、耕作放棄地、空き家の増加も起こっています。

これまでは大量生産・大量消費の高度経済成長によって数の資本主義が求められ、経済効率が上がってきたわけですが、これからは今まで誰も経験したことがない社会になる中で、それではまったく立ち行かなくなるわけです。そういった意味でも、これからは今までと違った視点を持たなければならないと思っています。

4. 未来社会をデザインする

そこで、静岡大学では先ほども紹介があった未来社会デザイン機構を持っているので、新しい未来社会をデザインすることが非常に重要だということで、今までとはまったく異なる社会をデザインすることによって、新たな時代に対応していけるのではないかと考えています。

最も分かりやすいのは、アップルがパソコンの性能よりもデザインを重視したことです。後から性能がついてきて、デザインとパソコンの掛け合わせで大ヒットした良い事例だと思っています。

これからは本当に自由な発想が求められるでしょう。自由な発想をするに当たっては、ある程度の知見や知識を積み重ねていかないとはいけません。天からデザインや発想が落ちてくるのは、やはり下地があってこそということが証明されています。知識・知恵がまったくない人に新しい発想ができるかという、それは非常に難しいでしょう。そういう意味では、新しいことをきちんと捕まえる必要があり、情報が大事になってくるのではないかと考えています。これからの自治体は、経済においてブルーオーシャン（新しい領域）を探すのと同様に、自分たちも新しいブルーオーシャンの中でどう残っていくかということを考えていかなければならないと思っています。

今まではPDCA（Plan, Do, Check, Action）を回していればよかったのですが、今はOODA（Observe, Orient, Decide, Act）が求められているといわれています。現状をしっかりと観察（Observe）し、その上で状況判断（Orient）をし、意思決定（Decide）を促し、最後は実行（Act）しないとはいけません。いろいろな形でやるか・やらないかが求められていますし、やってみて改善していく方法がこれからは非常に大切になってくると思っています。

VUCA時代に必要なものとしては、テクノロジーの理解と情報収集力、自らの頭で考える力、ポータブルスキル（汎用性の高い持ち運びできるスキル）をしっかりとつけることが求められます。これが人間力向上につながると思います。こうした人材育成を大学で培っていただき、大学生のフィールドワーク等を受け入れる中で、自分たちの地域の活性化にも非常につながっていると思っています。

誰も予測できない中で地域を存続させるためには、多様な人材が鍵となります。産官学金労言の連携・協力が欠かせませんし、自治体間や民間企業との連携ももちろんです。そして地域

活性化を目指すためにも大学の英知をお借りしながら連携を取っていくことが、小さな自治体のこれからの在り方だと思っています。

5. 松崎町第6次総合計画

私ども松崎町では第6次総合計画を策定したのですが、静岡大学にはいろいろな形でご協力いただいています。

総合計画では「コンパッションタウン松崎」を目指すことをうたっており、人のつながりの強さをしっかりと戻して、そこから企業や大学との連携、そして自治体間の連携につなげていくことを目指しています。

半島地域、特に先端地域においては「人」「もの」「金」が圧倒的に足りていません。当町でも新年度予算を組む際に、やりたいことができずに苦慮しています。格差社会にさいなまれているのは国民だけでなく、自治体も同様だと思っています。自治体間の格差は非常に拡大しており、ふるさと納税もしかり、いろいろな意味で格差が進行しています。その中でも、ないものねだりではなく、あるものをしっかり使って、地域の持続可能性を担保していきたいと思っていますので、いろいろな連携が必要だと感じています。

ただ、そこに介在するのは人であり、人がしっかりと高め合っていくことで地域の底力が発揮されます。地域の高齢者に幸せになってもらうためにも、大学や外部との連携は必要だと感じています。そういう意味でも、ぜひ皆さま方のお力添えをいただきながら新しい時代を創っていかれたらと思っています。

報告 6

紀美野町と和歌山大学の地域連携の現状

～中田の棚田×LPPを事例に～

中西円香（紀美野町役場まちづくり課係長）

北 裕子（小川地域棚田振興協議会長）

1. 紀美野町とは

（中西）

私たちは和歌山県の紀美野町から来ました。これから紀美野町と和歌山大学の地域連携の現状について、中田の棚田での活動を事例にご報告します。

紀美野町は和歌山県の北部に位置し、周囲は和歌山市をはじめ海南市、紀の川市など大きな市に囲まれています。大阪、京都、神戸までは車で1時間半から2時間ぐらいの場所です。それを遠いと思うか近いと思うかは住んでいる環境によるとは思いますが、われわれにとっては公共交通機関で行くよりも断然早く行けるので、基本的に車で移動する方が多いと感じています。

人口は約7700人で、高齢化率は当町も50%近くに達しています。町の約75%が山林という、典型的な中山間地域である一方、県立自然公園の生石高原、町立天文台などがあります。生石高原は新緑、秋のスキのシーズン、天文台は年間を通して、関西一円からたくさんのお客さまに来ていただいています。

そうした自然の観光がある中で、ここ10～20年で移住者が増えています。町の自然風景などを生かしながら、飲食店を経営したり、ゲストハウスを展開したり、新たな第三次産業が増えています。



図1 紀美野町の位置

2. 和歌山大学・紀美野町の間地域包括連携

和歌山大学とは2016年（平成28年）3月に地域包括連携協定を締結しました。これまでに24事業を実施し、現在8事業が継続中です。特に最近では、空き家調査や空き家データベース構築、ローカルパートナーシッププログラム（LPP）、ICT活用授業研究、DX推進、きみの地域づくり学校の5事業に力を入れています。

中でも、私が所属しているまちづくり課では、空き家関連やLPP、きみの地域づくり学校のほか、価値共創研究員といって、和歌山大学に月2回、地域おこし協力隊員を派遣し、大学と町をつないだり、実務と学術の両方を学んでくるようなことにも取り組んでいます。

きみの地域づくり学校はここ2年ほどの新しい事業です。先ほど人づくりの話も出ていたと思いますが、若者が地方に移住するきっかけをつくるために、仕事面をどうサポートするか、地域の実情をどう知らせていくか、つまり町にとって必要な人材はどんな人材か、どういう考えが地方で必要なのかということ学べる学校を大学と一緒に運営しています。大学からは、専門知識を持った先生や、先生のネットワークからそうした事例を実践している方に来ていただいて、講義をしていただいたりしています。

こうしたことによって、大学が持っている学術的・専門的な知識を存分に提供していただき、全国または世界につながる事例がこの町で行き交っているの、われわれのような小さな自治体の課題解決に大きな力を貸していただいているところです。

LPPは、対象は和歌山大学の観光学部生で、観光学部独自のプログラムとなっています。つまり、これは授業として行われていて、単位の認定もされます。対象地域は和歌山県内と大阪南部の市町村で、観光学部から一緒に取り組む事業の募集があり、そこに自治体が応募して採用されたら、4月から学生が募集され、活動が始まるというスキームになっています。地域の課題解決に向けた活動や調査、実践を通して、観光振興や地域再生の実践方法を現場で学んでいくことを目的に実施されています。期間は、1回の応募に対して2年間を上限に行われています。

紀美野町での受け入れ実績としては、分かる範囲では2015年度（平成27年度）以降で3団体が活動を受け入れてきました。そのうちのひとつである、中田の棚田での事業についてこれからお話しします。

3. 中田の棚田におけるLPP

(北)

中田の棚田は、中西が先ほどご説明した生石高原（標高870m）の麓にあります。現在、道路の拡張工事をしており、あと2〜3年もすれば完成して、紀美野町の悲願だった観光バスでの通行が可能になります。

私は、中田の棚田の再生に取り組む小川地域棚田振興協議会の会長を務めているのですが、その前身はまちづくり推進協議会という団体でした。2018年に1年間をかけて、何をもって紀美野町を活性化していくかということ議論し、テーマが観光に決まったのです。では、観光でどうしていくかということで、中田の棚田が素晴らしいのではないかとということになり、復活に取り組んでいます。「棚田が人をつなげる」「棚田が時代（とき）をつなぐ」というビジョンの下、2019年から活動しています（図2）。

棚田の特徴としては、まず歴史があるということです。棚田は通常、地権者がいて、耕作者がいるわけですが、中田の棚田は活動を始めたときに4分の3以上が耕作放棄地であり、ただ単に草が生えているだけでなく、木が生えて森に返ろうとしていました。それを6年前から少しずつ復活させています。です、稲作をしている地権者がいない状況の中で活動しています。それから、農薬や化学肥料を使わずに自然栽培の方法で稲作をしていることも棚田の特徴です。

そうした活動の中で和歌山大学の学生さんと出会うのですが、活動を始めた翌年の2020年から新型コロナがまん延しました。LPPの前身にローカルインターンシッププログラム（LIP）という活動があり、同じ小川地域で小学校を拠点にいろいろ活動をしていたのですが、それが全部ストップしてしまったのです。ところが、私たちの棚田の再生活動は、何とんでも屋外ですから密にならないので、人数は縮小しましたが、コロナ禍でもずっと活動してきました（図3）。

特に2020年（令和2年）には、竜王水の水路調査に行きました。元々、

活動団体	小川地域棚田振興協議会(R2)
面積	10ha(うち棚田9ha)
認定など	つなぐ棚田遺産 わかやまの美しい棚田・段々畑 棚田地域振興法指定棚田
概況	・3/4が耕作放棄 ・約6haを管理。うち水田1.2ha
活動	・地域おこし協力隊2期 1名 ・登録制ボランティア「棚田サポーターズ」(R3) ・月5回程度の活動日 ・田植え、稲刈り、薬を使ったWS
ビジョン	棚田が人をつなげる 棚田が時代(とき)をつなぐ

図2 中田の棚田再生プロジェクト概要



図3 棚田での活動の様子

和歌山大学の学生さんは一に草刈り、二に草刈り、三、四も草刈りという状態だったのですが、草刈りばかりというわけにもいきませんし、それだけではモチベーションも上がらないので、何のために活動しているのかを分かってもらうために、水路調査に行きました。

棚田は田んぼなので水資源が欠かせないのですが、中田の棚田の水資源は、先ほどから何回も出てくる生石高原に降った雪や雨が浸み込んで湧き水となり、伏流水として出てくるのを集めて棚田に配る仕組みになっています。何百年も前に手掘りした水路を今も使っていて、それ自体が土木遺産的に非常に価値があるといわれています。その水路のことを竜王水と呼んでいます。調査したときは12月だったので、道なき道を歩いて到達した生石高原には雪が降っていて、学生さんたちと一緒にその美しさに感動したのを今も覚えています。

それから、草刈りの合間を縫ってシイタケの駒打ちなど別の作業を行ったりもしています。棚田での田植えイベントは今年で6年目を迎えました。また、棚田が一望できる場所でマルシェを開き、学生さんにそのお手伝いをしてもらったりもしました。

単に稲刈りイベントや田植えイベントだけでなく、学生さんたちが棚田で他に何ができるのかを考えて、子どもたちに参加してもらう企画を考えました。その一つがウォークラリーです。このように単に田んぼを復活してきれいな景観を保つだけでなく、棚田を活用した企画にも取り組みました。

4. 活動による影響と課題

いろいろな活動をしてきた中で、どういう影響があったかを整理してみました。

まず、活動には協議会のコアメンバーに加え、サポーターズという紀美野町外から来るボランティアの方々がいらっしゃるのですが、その人たちに加えてLPPの学生さんに入ってもらうことで、コミュニケーションが活発化しますし、華があります。私のような者がうろうろしているよりも、学生さんがにぎやかに話をしていると温かくなります。

それから、イベントの人的補助や企画運営への参加があります。私たちを含め皆さんボランティアでやっているのですが、場所が広いですし、どうしても人的な面が足りないので、学生さんに助けてもらっています。サポーターズの中には5~6年続けている方もいらっしゃるのですが、活動そのものを楽しんでいて、技術的にもブラッシュアップしている一方、企画をしたり、棚田再生を今後の観光にどうつなげていくのかという考えをまとめることがなかなかできないので、学生さんにはその辺を考えていただくとありがたいと思っています。

加えて、新しい視点での棚田の価値創出という影響もあります。観光学部の学生さんたちなので、単に米を作る場所というだけでなく、防災や文化の伝承、生物多様性などさまざまな機能を持つ棚田をあらゆる視点から眺め、地域活性の場にしていく活動に加わることによって、いろいろなことに気付かせてくれます。

私どもの団体ばかりが学生さんにお世話になっている感じがするのですが、学生さん自身も農業に触れる機会はなかなかないと思いますし、ましてや米作りに参加できる機会はどんどん減っていると思います。というのも、小さい面積での米作りはなかなか稼業になりませんし、逆に広い面積での米作りは機械化しているので、体験ができる場もなくなっていると思います。学生さんにはとてもいい体験の場になるとと思いますし、作業することによって自身の心の浄化にもつながるのではないかと思います。

活動の課題としては、先ほどからよく出ている田舎あるあるで、とにかく交通手段がなく、インフラ整備が行われていないので、学生さんに来ていただくには車が欠かせません。車ではたくさんの人に来ていただくこともできないので、もっとスムーズに学生さんにも来てもらえ

るような仕組み、もちろんこれは私どもの町内のインフラを考えることにもつながるのですが、その辺は本当に課題です。

それから学生のモチベーションが課題です。特にリーダーの存在が重要であり、いろいろなことをお手伝いいただいた中で、かなり精力的にリーダーが動いてくれると学生さんも動きやすいので、どんな方がリーダーになるかというのが活動にいろいろ影響を与えていると思います。

2年ぐらい前からは担当の教授についていただいて、いろいろ活動しました。学生さんにとってはきちんと学びの場になってもらわないといけないのですが、受け入れる側の私たちにはそこを指導できる能力もないので、フォローする先生と一緒に来てくださったことで、特にこの2年間は充実した形で活動できたのではないかと考えています。そうしたことが学生さんの学びにもつながっていると思います。

それから、マネジメントの難しさも課題です。学生さんを受け入れる上で、もっと内容を充実したり、いろいろなことを考えるにしても人的な面が足りないので、そこも含めて学生さんに協力していただけたらうれしく思います。

先ほどおっしゃっていたように、棚田を使って郷土愛を育てていくことにも学生さんの力を借りたいですし、今はこうやって棚田の再生をしていますが、いつまでも国や町のお世話になるわけにもいかないので、自立して継続していくためには観光を活用したビジネスという視点も必要です。棚田には多様な価値があるので、そこをもっと深く研究しながら前に進めていきたいと考えています。その手助けをぜひとも和歌山大学の皆さんに引き続き行っていただけると、地元としては非常にありがたいと思っています。

パネルディスカッション

辻本——それでは、第2部のパネルディスカッションを始めます。パネルディスカッションには、前半の報告者5名の皆さまに加え、和歌山大学紀伊半島価値共創基幹教授の岸上光克様がオンラインでご参加くださっています。また、静岡大学地域創造教育センターの阿部耕也特任教授にコメントをいただきます。パネルディスカッションの司会は、静岡大学地域創造教育センター准教授の山本隆太が担当します。それでは、よろしく願いいたします。

山本——本日のご報告を受け、パネルディスカッションではパネリストの皆さま、それからコメントーターのお二人からコメントをいただき、改めて今回の研究フォーラムのテーマである「半島から広がる可能性」について議論していきたいと思っています。

今回の趣旨にもあるように、条件不利地域の課題解決という側面だけでなく、可能性はたくさんあるのではないかと思うのです。今回は、これまでの大学と地域の連携においてさまざまな蓄積や効果についてご報告いただきました。パネルディスカッションではそうしたご報告の内容を踏まえ、今後さらにどういう可能性があるのかということ、将来の取り組みの見込みや期待も含めて論点として出せればと思っています。

まず最初に、パネラーの皆さまのご報告の中でもう少し聞きたいという部分があると思います。私も考えてしたのは、中西さんのお話で、学生の受け入れ態勢をしっかりと整えられ、ローカルインターンシッププログラムということで地域の関係者・団体をつないでおられました。和歌山大学側としては、地域に声がけをして課題を吸い上げ、それを授業として組み立てて派遣しているというお話を伺いました。静岡大学では、自治体と共にというよりも教員や学生の関心、あとは地域のニーズを総合的に擦り合わせていて、自治体に1対1で入っていくような感じではない面もあります。

今回、課題の部分はあまり話がなかったと思うのですが、地域の側から大学側に課題を挙げて、マッチングの部分を調整されている中で感じられている課題がもしあればお願いしたいと思います。

中西——自治体としては受け入れの募集があれば申し込むのですが、この地域のこの活動内容だったら学生の応募があるだろうとか、この活動にはこの先生が適しているのではないかというのは観光学部ですべて考えてくれます。私たちは、地域の方々にどんな活動をしていくか、学生さんにしてほしいことは何かというのを聞き取って、この先生なら担当に付くことができるという一覧もいただくので、その先生にコンタクトを取って、先生についてもらってこんなことをしようと思っているという第一報を入れます。事務的なことは大学の観光学部ですべてしていただくので、私たちは地域の中のことでとどまっているという感じです。

山本——ということは、地元のニーズは吸い上げるけれども、そこからは大学ということですね。逆に大学側の内山先生に伺いたいのですが、お話があったように教員のリストがあって、吸い上げられてきた地域のニーズに大学の先生が応えられるかどうかというのはどうなのでしょう。

内山——それを把握できている部署がどこなのかという問題もあると思いますが、サテライトでも先生方のデータベースというか、伊豆半島でどんな研究をされているのか、何が専門な

のかといったことをしっかり情報収集し、データベース化します。東部サテライトにいと地域の課題も見えてくるので、本来はマッチングまでできればいいと思いますが、実際にはそこまでできない状況ですし、サテライトにいと先生方とのネットワークが限られてしまいます。ですので、例えば大学で地域連携の推進本部のようなところで、伊豆半島に限らず静岡県全体で先生方の情報収集をすることが、これから大学が地域連携を進める上で必要なことだと思います。まだそこまではできていない感じがしますし、サテライトでも難しいというのが現状です。

山本——コメンテーターの岸上先生は、地域から上がってきたニーズを大学側としてマッチングすることに直接関わっていますか。

岸上——課題自体も非常に多様化しており、1人の先生で対応できるかどうかという問題もあります。和歌山大学では今のところ、マッチングに関しては紀伊半島価値共創基幹で行っています。基本的には1人の先生をその地域のニーズや課題とマッチングして地域に入ってもらっていますが、1人の先生では地域の課題をなかなか解決しにくいので、複数の先生でチームを組んで地域に入ってもらいたいような方向性を模索しているところです。特に私が担当している食の総合研究教育センターでは、農業と農村の活性化を研究しているのですが、チームを組んで地域に入っていく形を基本としています。

山本——なるほど、そういう形で進められているんですね。地域の側では、最後の北さんの発表にもありましたが、学生の学びになっているかどうか不安ということで、先生が入ってくると学びに昇華される、転換されるという話がありました。北さん、その点で何か実感するようなことはありますか。

北——2024年12月に初めて、学生の発表会を現地で行いました。それまで私もそういう意見を聞く機会がなくて、学生たちも棚田には来ていただいていたのですが、彼らは何を学び、それをどのようにアウトプットしていくかというのをまったく聞かないまま、一緒に活動していたところがありました。

しかし去年、報告会で初めて、学生がこんな思いで棚田に関わっていたのかということや、こういう視点をもっと深めていけばどうかという話を聞いたので、もっと早くにこうしたことができて、先ほどのサイクルを回せばよかったと思っています。これからさらにブラッシュアップできるような関係性を築いていけたらいいと思いますし、先生方のご指導をいただけるとありがたいと思っています。

山本——静岡大学では地域創造学環というところが学生の引率をしており、報告会を毎年開いていて、深澤町長にもおいでいただいています。松崎町に来た学生の声を町長や地元の人が直接聞く機会として報告会があると思うのですが、北さんのお話にあったように、報告会で学生の声を聞くことは重要でしょうか。

深澤——先ほど申し上げたように、大学がない地域で学生が何をしているかというのが非常に気になる方も地域にはいらっしゃって、中間と最終年度で報告会を行うと、皆さんそれなりに興味を持ってくださいますし、学生の皆さんにとっても、地域の人の反応を見られるので、そ

れなりに成果を求められると思っています。

自分は元々町長ではなくて役場の職員として、受け入れを中心に担当していた経緯もあるので、そういった意味ではより広く発信したいと思いますし、学生が来ることによって、それまであまり一生懸命取り組んでいなかった自主防災の会長が一生懸命になったりするのです。そういう意味ではいい刺激になって、商店街も学生が来ると刺激を受けて、おっちゃんたちもかっこつけるので、そういう意味では地域活性化に非常につながっています。こういう活動を地道に続けていくと、地元の人々の活力につながり、一つ一つを積み重ねると、最終的には地元のウェルビーイングにつながるとと思っています。

山本——続きまして、先ほどの報告の中で豊田先生のリモート教育の話が時間の関係でできなかったのですが、ここで話したいと思っています。その後、深澤町長、内山先生からも、遠隔地の小規模校での取り組みは、松崎あるいは伊豆半島においていろいろな示唆が得られると思っていますので、その可能性についてご感想をいただきたいと思っています。

豊田——和歌山県では25年前に遠隔授業の取り組みが全国に先駆けて行われ、当時のNTTのCMでは紀美野町の例が取り上げられています。その後、県教育委員会でも小規模校をつなぐテレビ会議システムの活用が推進されました。

私が学校で関わっていた取り組みとしては、例えばビブリオバトルがあります。自分が読んだ本の概要をみんなに伝えて推薦するのですが、少人数の学級で推薦しても盛り上がらないので、4校が校種を越えてビブリオバトルを行いました。早くからこういった活用がなされています。

それから、和歌山市と新宮市は車で3時間ぐらいかかる県内の両端の市なのですが、コロナ禍でなかなか県外に行けないということで、児童がお互いの地域を修学旅行で訪れ、互いの地域の良さやお薦めのお土産などを発表し合うような取り組みが行われました。このようなコーディネートやアイデア、もしくは実践の価値付けのようなことを行ってきました。特に山間部ではカリキュラムの中に完全に合同授業が入っており、相手校の黒板や児童の様子を見ながら授業を展開するようなことが通常となっています。

こういった交流校を見つけるのがポイントになるわけで、今は試行段階ではありますが、学習マッチングサービスができないかということのを企画しています。県内同士であれば、川の上流と下流の学校、山間部と海岸部の学校、伝統的な祭りをテーマにしている学校同士が発表し合うようなことがうまくできればと思います。

今までの遠隔授業は、現職の先生が大学院に通い、大学院での出会いを基にそれぞれの地域の交流を活性化するような限定的なものが多いので、ここに来れば学校間交流ができるという情報が集まっていて、マッチングしてくれるようなものを作りたいと考えています。

それから、例えばローカルな地域や山間部の地域では、こんな植物や動物は見たことがないけれども新種ではないのかとか、こういう地層があるけれどもどんな価値があるのかという場合があるので、大学の専門家への支援要請のようなことが公式にできないかということも考えています。

大学がコーディネートする部分を構築して、専門家との交流を含めて交流の価値付けをしたり、それを教材にしたりすることができればと考えています。

山本——将来、良質な教育コンテンツに関しては、ブロックチェーン取引で地域にお金を入れ

られないかという構想もあるようですが、どういうことでしょうか。

豊田——今は研究委託なども受けていますが、年間を通じて自治体が研究委託を大学にすることができたら、それを地域に還元できないかということを考えています。

山本——お金をどうするかというのは大事なところだと思います。

豊田——一方的に研究費としてもらうだけでなく、実は今も紀美野町さんや紀の川市さんでは行っているのですが、研究委託をもらって購入した教材やプログラミングキットなどを現場で検証して、それを現場に返しているのです、そういう意味合いで思っていたらいいと思います。

山本——深澤町長、小規模校のオンラインの取り組みはいかがでしょうか。

深澤——松崎町は規模が小さいので幼保小中高まで全て1校ずつしかないのですが、一つだからいいということではなくて、県内のいろいろな他の学校との連携や知見を広げるという部分には非常に興味があります。高校に関しては県教委の方でサテライト化の準備が進められていて、掛川市にある県総合教育センターあすなろから賀茂地域の4高校に授業を遠隔配信する計画です。小規模の高校になると教員の数が限られてしまうので、いろいろなものをシェアリングエコノミーの考え方で使っていかなければならないと思っています。和歌山県でも遠隔地の小規模校でそうした先進的なことが行われているということで、自分たちも視野が広がる非常にいい情報だったと思います。

内山——本当に素晴らしい取り組みだと思って聞いていました。深澤町長もおっしゃったように、伊豆半島も東西南北で自然環境などいろいろな条件が大きく異なるので、学校の交流を促進するために大学が中心になってマッチングを行うのは面白い取り組みだと思いました。

最近はこの高校でも探究学習に力を入れているので、そうしたところに大学生がリモートで入り込んでいます。静大でも、伊豆半島の高校の探究学習にリモートで学生が入って交流する機会をつくったり、先ほど事例にあったように、いろいろな教育実習で出前講座などをされていると思います。われわれも教育学部との連携を進めながら、伊豆半島で出前講座をしてくれるような学生や先生を見つけて一緒に取り組んでいきたいと思いました。

山本——豊田先生からは県教育委員会とのタイアップがあるという話がありましたが、インターネットがつながればどこでもつながることができることを考えると、例えば松崎町と別の地域とか、半島のもっと先端部とか、北海道や沖縄も含めていろいろなところに可能性があるのではないかと思います。和歌山県内では共通の学習指導の枠組みがあるからやりやすいのでしょうか。

豊田——そのとおりです。もう一つは、会える可能性があるということです。小規模校はバスをチャーターしさえすれば行き来しやすいので、情報の交流だけでなく人的交流であったり、高校に進学してからの交流も想定していて、まずはローカルを主軸に検討しています。

山本——やはり対面を見込まれていて、そのためにオンラインをツールとして使っているのですね。

もう一つ論点としてあったのは、学生の受け入れに関することです。これまでは北さんや中西さんのご発表のようにマッチングをして、岸上先生からお話があったように、複数教員が担当して学生と教員が地域に入っていくということも今後はあるかもしれません。松崎町には前から学生が入っていますが、長期にわたる取り組みを踏まえて、学生が入ってくることの意義として今後どのようなことを期待しますか。

深澤——当町のフィールドワークは、いつも1~2泊ぐらいのショートステイなのです。その中でいろいろなことを提供するために、こちらもある程度仕立てをして、住民の方に理解してもらうように事前に報告したりはしていました。紀美野町では、50日とかロングステイの場合もあるのですか。

中西——長くても1泊2日程度です。

深澤——いろいろなところで話を聞くと、1週間ぐらいいると学生にも地域の本質が分かるということもあるようです。当地域は人口減少も縮小社会もトップランナーですし、日本がこれから考えなければいけない課題が総合デパートのようにあるので、人がいないということを痛感するにはもう少しロングステイした方がいいのかなというところがあります。

ただ、大学側も安全管理の面や、学生を派遣するに当たっての経費などがこれからの課題だと思うので、そうしたところは民間からの協力を仰ぐ必要もあると思います。先ほどブロックチェーンの話もありましたが、当町もNFT（非代替性トークン）などを使って課題解決のつなぎを表にもっと出せたら学生も来やすくなるし、大学としても派遣しやすくなると思っています。課題としては、移動の面はどこの半島も厳しいと思っています。

山本——逆に言うと、不便を力にという話もありましたが、離れているからこそ閉じ込めておけるというか、長期間そこに滞在できるという面もあるかもしれません。今後の可能性としては、内山先生からもお話があったように、これまでのサークルやゼミ演習といった形のみならず、地域連携の枠組みの中で学生が長期にわたって入れる可能性があるといいのかもしれません。

そのとき課題になりそうなのは、大学側としては授業に位置付けると単位時間で換算されるので、活動時間をそのままカウントすると結構な単位になってしまうということです。そこは大学側で工夫が必要で、何らかの措置を講じて学生が長く行けるようにする一方、受け入れ側の自治体としては、産官学に金を含めていろいろな体制で受け入れる可能性があるのではないかといいことですね。

学生の長期滞在について、パネリストの方にそれぞれ伺いたいと思います。最初に内山先生、先ほど海外における事例について話されていましたが、改めて長期滞在についてどう思われますか。

内山——地域連携を本気でやるなら、学生がもっと地域に入り込むことが必要です。インドネシアでは地域住民の家に住み込んで、生活を共にすることまでやっていたので、本気度が問われると思います。ただ、それを授業ではできないとなると、夏休みなどの期間を利用してビジネス界の人たちともコラボレーションしながら、何かクリエイティブなものを成果として出せ

のような仕組みによって、学生に魅力を感じてもらえたらいいなと思っています。

山本——北さんに伺いたいのですが、学生が長期滞在することについてどう思われますか。

北——実は私どもの棚田の近くに、地域づくりに取り組む団体が作った簡易宿所的なところがあるのです。先ほど中西さんが言ったように1泊2日ぐらいで体験などをしているのですが、それは恐らく学生同士のコミュニケーションが中心という感じで、もっと地域に入り込むことはもちろんありがたいと思うのですが、今のところ場所が確保できていません。いずれは学生が行ったり来たりするだけでなく、少し時間をかけて隅々まで見てもらったり、体験だけをするのではなくその後で振り返りをしたりすることも大切です。そのために滞在が必要なのであれば、そうしたこともできるようにしたいと思っています。

中西——学生が地域に長期間滞在するには、学生がどれだけ興味関心をその地域に持てるかというところもあると思う一方で、受け入れる地域の人も学生にきちんと情報を与えてあげる必要があると思います。そうでないと、ただ長くそこにいただけになってしまうと思うので、そうした準備も必要だということは、自治体として受け入れ地域の団体の方々にお伝えしないといけないと思いました。

定期的に来て、断片的に地域の情報を学び、最後に発表したりする場があると思うのですが、地域の人に報告するとなったときに、住んでいる人が地域のことを一番よく分かっていますから、それを超えろというわけではないのですが、その人たちが思いもしなかったことを伝えてほしいという気持ちは地元の人にも多分あると思うのです。なので、長期的に来てくれて、その学生が自分の目で見て、新しい視点を入れた報告を返してあげると、それが短くて単純な内容だったとしても、地元の人には喜ぶのではないかと思いました。

山本——学生が新しい意見を出してくれるためにも、事前の情報をどう出すかということは結構大事だと思っています。中西さんのご指摘にあったとおり、長期滞在するのであれば、その地域の情報をあらかじめ出しておく、今の学生はその情報を吟味した上で参加してきますので、それと少しでも違おうと急激にモチベーションが下がってしまい、活動が困難になることもないわけではないと思います。そういう意味では、どのような事前の情報を出すかというのは吟味が必要かもしれませんが、そうした形で大学に情報をいただくと、こちらとしてもそれを踏まえて、私たちが報告するときには新しいアイデアを報告しようということを先に学生に伝えておけば、そのことを理解した学生がしっかりと取り組んでくれるのではないかと思いました。

今度は学生を送る側の先生方に伺いたいと思います。豊田先生のところでは「さらさ」という学内の場でICT教育をトレーニングした学生さんが、いわゆる出前授業や実習という形で学校の現場に出かけているという話だったと思います。その場合、学校現場に限定して出ていくので、地域への広がりはいよいよとしたらあまりないのかもしれませんが。最近の学生さん、特に教職課程を取っている学生さんは、学校に出ていくことをどのように考えているのか、学生の意識として地域をどう捉えているのか、先生の所感を交えて教えていただけますか。

豊田——二極化していると思います。和歌山の大学に来たのだから、地域にもっと入り込んでいきたいという学生もいますし、人とのコミュニケーションが面倒で、単位だけ取ればいい

という学生もいます。

和歌山大学では早くからへき地・複式教育実習というものに取り組んでいて、学生が地域住民として地域に入り込んで実習をしています。地域への入り込み方には2タイプあって、一つはホームステイを行います。退職した校長先生や地域で広い家を持っている方など、学生を2週間滞在させてもらえる方にご協力いただいています。ある程度のお礼はお渡ししますが、それよりも、地域の方々が学校を盛り上げたいという思いが強くて、学生を受け入れてくれています。これがやりたくて本学の教育学部に来る学生がいるぐらい、学生たちにはすごく効果があると思います。

もう一つは合宿形式です。県営や町営の合宿施設に寝泊まりしていて、県営の施設なら1日1000円強で泊まれます。合宿になかなか参加しつづけない学生もいますが、逆に「楽しいからみんなでやりたい」と言う学生もいて、本当に特性によって違うと思います。みんなで夜な夜な教材研究ができて、オールナイトで教育について語り合ったり、教材を作ったりもできるので、行ってみると本当にいい体験だったとみんな言うのですが、そういった人との関わりに苦手意識を持っている学生も特にコロナ禍以降は多くなっています。

山本——非常に面白そうな取り組みですね。私も教職課程を持っていて、教材などは寝ずに作っているのですが、それが恐らくブラックな部分につながっているかもしれないので、今の学生にどう伝えるかというのは難しいですね。

学生がどういう意識を持っているかということを少し情報共有したのですが、地元の視点から、今の小中高生がどんな考え方を持っていて、特に大学に対して高校生がどんなことを望んでいるかということ、今後の可能性の検討のために教えていただけますか。

深澤——何度も申し上げていますが伊豆半島には大学がないので、大学生と触れる機会は自分のきょうだいぐらいしかないと思います。そうした中で、大学生が来たときには地元の中高に関わってもらっています。中学生ぐらいから本格的に大人の世界に向かって動き始めるので、キャリア教育のスタートは中学だと私は思っていて、そこに何とか刺激を与えていきたいと思うのです。

小学校を卒業するときに語っていた夢というのは、実現することがなかなかないのですが、中学ぐらいになるとどうなりたいかというジャンルが絞られてきます。その頃から、自分はこういう人間になりたいかということを考える時期だと思うので、そういうときに学生たちが、自分たちの学生生活であるとか、自分たちはどういう形で今の進路を選んできたのかという話を聞くことは非常に刺激になると思います。

元々人口も少ないので、生まれてから高校を卒業するまでに会う大人の数、聞く言葉の数、あらゆることを体験する機会が少なくなっているという自覚が必要だと思っており、学生との触れ合いや先生と話をする機会というのは地域にとっては非常にありがたく、将来に向けても良いことだと思っています。

中西——私自身、自分の仕事の中で子どもたちに関わることがほとんどなく、適切な回答ができるか分かりませんが、今の町長のお話を聞いていて、自身の中学時代のことを考えていたら、そんなロールモデルのようなものを特に考えずにそのまま高校に進学していたなと思いました。そこに大人の人が現れて、自分もちょっとお兄さん、お姉さんになるのかなと思う機会があるのはすてきなことだと思いました。紀美野町ではそういう機会があまりなさそうな感じがする

ので、もしかしたら棚田で何かできるのなら、導入していい視点ではないかと思いました。

北——私も年齢的に子どもと触れ合う機会がないとはいえ、実は明日、私どもの町の小学校の総合学習で、棚田のことをしっかり伝えてお米のことを知ってもらう教育をする予定なのです。しかし、棚田のフィールドは交通の便がないので、学校から直接棚田に来てもらえません。先ほど来、教育の関係でDXやAIが普及しているという話が出ているのはいいことなのですが、やはり足りていないのは、子どもたちが現場に足を運ぶということだと思うのです。

田舎だからといって子どもたちが川遊びをしているか、山で走り回っているかという、今はほとんどありません。危ないから川に行ってはいけないし、都会よりも登下校の送り迎えをするので自然に触れることがないのです。だから、DXなどの形で教育をしながら、リアルで子どもたちに体験してもらうことが大事だと思います。

特に棚田のような条件が不利な地域を体験してもらうことが大切で、そのときに地域だけだと私たちも含めて人的に大変なので、そこにうまく学生たちが関わってくれるような仕組みがあったら面白いと思います。それにはお金も若干かかるので、国が地方創生に力を入れているのであれば、そういう視点も入れて一緒に教育をサポートくれたらうれしく思います。

山本——棚田の作業で大学生と地元の子どもたちが触れることはあるのですか。

北——今までは棚田の稲刈りなどのイベントに保護者が子どもを連れてきたときに触れ合うことはあります。子どもたちが私たちと付き合うのもそうですけれども、学生が来たらコミュニケーションをたくさん取れるような場を提供できるといいと思っているので、課題を解決して具体的に進めたいと思います。

山本——最後にパネリストの方から一言ずつ、今日のフォーラムで言い残したこと、あるいは改めて今後こうしていきたいということについて触れていただけたらと思います。

内山——大学がつなぐ役割をすること、そのためにサテライトが地域と地域をつなぐ、学生と地域をつなぐ、先生と地域をつなぐ役割を果たしていきたいと改めて思いましたし、大学生が地域に入ることの意義を棚田の取り組みなどで非常に感じたので、そういう仕組みを早く作りたいと強く思いました。

豊田——紀美野町からもご報告があったように、子どもたちの体験が不足していると本当によくいられています。難しい学問よりも、学生たちを地域に送り込んでそこで体験させたことがまた大学での学びを充実させ、卒業後も地域に貢献する仕事をしていきたいという思いにつながっていきます。私は普段教育分野にしかいなくて、地域のバックグラウンドをあまり考えていなかったのですが、学生にそういう経験を積ませて、地域貢献につなげていきたいと今日は強く感じました。

深澤——静岡大学さんとはかなり長くお付き合いをさせていただいています。例えば、商店街のパフレットを作るときに、地域の人から「商店のパフレットではなくて店主のパフレットを作ってくれ」という意見が出て、そのためには学生はその人がどういう人なのかを調べなくてはなりません。そうするとコミュニケーションを取らなければならないので、そういう視点は非常に面白かったと思います。外から見た店主の人間性とか、何が売りなのかとい

うのを盛り込んだパンフレットを作ったり、マンネリ化している防災訓練に対していろいろな提案をしていただいたり、地域で学生の視点を広げることができますし、逆に学生が外から見た視点によって地元の人がはっとすることもたくさんあります。

そうして相互支援のきっかけになっていたという感じは受けていますし、「半島から広がる可能性」ということでは、同じような課題を持っている半島として、半島防災という言葉ができたぐらいの条件不利地域として、その不便を解消してどうやって価値を上げていくかということと一緒に考えていけたら、かなり面白いことができるのではないかと期待を持っています。

中西——当町も和歌山大学の先生方にはさまざまな事業でお世話になっています。今後も新しい時代に適応したいろいろな事業が出てくるごとに、それを研究されてきた先生の知恵や経験を借りながら、今後もお世話になるだろうと思っています。自治体としても、棚田のように地域の活動で大学とつながりたい場面もあると思いますので、私たちはその間に立って地域と大学をつなぐお手伝いをこれからもしていこうと思いました。そのときには、先ほど岸上先生もおっしゃっていたので、おんぶに抱っこでよろしくお話ししたいと思います。

北——今回こういう場呼んでいただいて、大学の学長さんお二人の前でお話しするような経験は恐らく一生の間にそんなにないと思います。ストレートにいろいろな意見や考え方を伝えさせていただいたので、こんな機会をいただいたことに心からお礼を申し上げます。

この前も浜松の別の棚田の方が和歌山を訪れてくださったのですが、やはりよその視点が入ってはじめて、自分たちが普通に考えてやっていた取り組みに相手側がものすごく感動してくれていたことが分かったので、改めてコミュニケーションが大事なのだということもすごく理解できました。条件不利地域と松崎町長もおっしゃいましたけれども、それを逆手に取って元気にしていくような活動を、今後もしっかり続けていきたいという決意を新たにしています。

山本——それでは最後にコメンテーターのお二人からコメントをいただきたいと思います。

岸上——今日は本当に多様な報告がありました。今回のタイトルは「半島から広がる可能性」ということで、可能性は大いにあるなと思いつつ、誰が可能性を見いだすのかというときに、学生に半島の可能性を見いだしてほしいという希望もあります。私は都市農村交流を研究課題の一つとしているので、半島に住んでいる人が可能性を打ち出すより、やはり都市部の人に半島の可能性を大いに語ってもらいたいと思っています。そうした形で価値観の変容みたいなものをこれからわれわれが生み出していかなくてはいけないと強く感じたところです。

地域と大学との関係で、学生を地域に長期滞在させるという話もありましたが、現実的にはなかなか難しい面があります。今日ご報告いただいた豊田先生もそうですけれども、長期的に継続して教員と学生が地域に関わるのが非常に重要だろうと改めて思いました。また深澤町長もおっしゃっていましたが、あまり会うことのない大学生が地域にいることもそうですし、立場の違う人たちが地域に関わることは非常に重要だと改めて感じた次第です。

阿部——昨年度で退職し今は特任ですので、少し客観的に見られる立場から楽しく刺激のあるお話をお聞きしました。フォーラムには第1回から関わってきたので、その観点からお話しさせていただきます。

これまでの4回では大学の関係者による報告が主だったのですが、第5回の今回は紀美野町の方々と松崎町長にも報告者として参加いただきました。連携・協働における地域側の方々から意見や報告を頂けたという意味で感激しています。

本山学長、塩尻先生、内山先生もおっしゃっていたように、それぞれの半島地域が抱える課題の深刻さ、状況の大変さは痛感しつつ、さまざまなパートナーに働きかけ協働するという取り組みをされているお三方がどこか楽しそうで、手応えを感じている様子が伝わりました。大きな課題を抱える地域ですが、むしろ課題の最先端地であって、大学にも教員にも学生にも大きな学びのある場所だと実感しました。

課題というあまりいいイメージがありませんけれども、この地域をもっと住みやすくしたい、生き生き暮らしたいという願いがあるから逆に課題が見えてくるので、そういう意味で願いに裏付けられた課題がこの二つの地域にあって、それが取り組みにも関係しているのだらうと思いました。

豊田先生の取り組みでは、地域からの要望がフィールドワークなどを通してあったという話でしたが、地域に入ると子どもたちや若い世代を刺激してくれ、支援してくれということをよく聞きます。地域の人口流出の大きな要因が子どもの教育環境にあるという話もありますので、教育環境をサポートするととても素晴らしい取り組みだと感じました。

もう1点お話ししたいことが松崎町の取り組みについてあります。町の総合計画に大学との連携が組み込まれたという話を聞くと、首長の立場だからそうしたことができると感じられるかもしれません。しかし、「2030松崎プロジェクト」やそれ以前の取り組みは、深澤さんが町長になるずっと前、町役場の一職員だった時から始まっています。町長というリーダーがいろいろな活動をしているというふうに見えると、この事態は少し違って、課題に組み込み、深澤さんたちがきっかけとなるトーチを周りに渡していった明かりが広がっていくようなイメージの方が合っていると思います。トーチというのは^{たいまつ}松明のことですが、松崎町の明かりをそんなふうにして広げたわけで、首長だからこういう活動ができたというわけではないということをお伝えできればと思います。

山本——ありがとうございます。以上で第2部パネルディスカッションを終了したいと思います。改めましてパネラーの皆さま、そしてコメンテーターのお二人に拍手をお送りください。

閉会挨拶

塩尻信義（静岡大学未来社会デザイン機構副機構長）

今日は本フォーラムで情報提供を含めて活発なご議論をしていただいたことを大変うれしく思います。和歌山大学、紀美野町、松崎町から本フォーラムにご参加くださった方々、また登壇いただきました方々、そして今日ご出席の方々に厚く御礼申し上げます。今日全体を聞かせていただいて感じたことを最後に述べたいと思います。

一つ目は本フォーラムの趣旨に関係することですけれども、半島地域における高齢化とそれに伴ういろいろな課題を考えると、それはまさに半島以外の日本の地域の将来そのものであり、そういう意味で本フォーラムが開催されていることの重要性をすごく感じています。

具体のご報告の中では、棚田の再生あるいは教育DX等々がございました。ご報告いただいている方が明るく意欲的であったことが、私にとっては非常に印象的でした。また実際に関係者が連携・協働を行って行く中で、いろいろな形があるわけですけれども、効果的に成果を得ようとする場合、かなり大きな地域連携のネットワーク、プラットフォームの構築が非常に重要で、効果的なのではないかと思います。私どもは特に静岡県東部や伊豆地域に貢献したいと考えて東部サテライトを設け、また沼津のオフィスを開設していますけれども、地域でより強い貢献をしたいと考えたときに、プラットフォーム等の構築が必要になってくるのではないかと強く感じています。併せて、やはり地域連携の主役は人だと思えます。松崎町長からご指摘があったように、人と人とのつながりがすごく大事であり、地域連携の現場が重要です。リアルな現場、リアルな体験が人材育成にとって大切であるということを私も強く感じましたし、こういった内容を今後の静岡大学の地域連携に生かしていきたいと思っています。

今日ご出席の方々におかれましても、このフォーラムで得られた情報や意見交換の内容を、それぞれの地域連携の中で、あるいは大学の活動の中で生かしていただければと思います。

静岡大学としては、この半島フォーラムをさらに継続・発展させていきたいと思っていますので、和歌山大学の学長はじめ関係の方々に、緊密な連携をよろしくお願ひしたいと思えます。日本国内には紀伊半島だけでなくいろいろな半島がありますので、さらに他の地域・大学との連携を深め、より大きなレベルでの半島フォーラムに発展していくことを期待しております。最後に、この半島フォーラム、和歌山大学と静岡大学、そして半島にある地域の発展を祈念しまして、私からの挨拶に代えさせていただきます。今日は本当にありがとうございました。

公開シンポジウム

地域課題解決支援プロジェクトを振り返る

日 時：2025年12月22日（月）14:00～16:00

開催方法：静岡大学事務局別館1A会議室（対面会場）とオンラインによるハイブリッド開催

コーディネーター：山本隆太（静岡大学地域創造教育センター准教授）

プログラム：

（1）開会挨拶・趣旨説明 水谷洋一（静岡大学地域創造教育センター長）

（2）地域連携・課題解決支援の事例報告

報告1「地域課題解決支援プロジェクトとは？」

報告者：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター特任教授）

報告2「地域の視点から」

報告者：深澤準弥（松崎町長）

荒武優希（合同会社so-an 代表社員）

金刺重哉（伊豆市土肥町）

（3）パネル・ディスカッション

パネリスト：阿部耕也

荒武優希

金刺重哉

久保山健太（川根本町立三ツ星学園）

増田彩香（株式会社Otono）

（4）閉会挨拶

塩尻信義（静岡大学教育担当理事・副学長）

開会挨拶・趣旨説明

水谷洋一（静岡大学地域創造教育センター長）

皆さま、本日はお忙しいなか「地域課題解決支援プロジェクトシンポジウム2025」にご参加いただき、誠にありがとうございます。静岡大学地域創造教育センター長の水谷でございます。まず初めに、本日のシンポジウムが、静岡大学のキャンパスにお集まりいただいた皆さま、そしてオンライン



(Zoom) を通じて各地域からご参加いただいている皆さまとの、ハイブリッドという形で開催できますことを、大変うれしく思っております。

松崎町、東伊豆町、伊豆半島ジオパークをはじめ、これまでプロジェクトに関わってくださった地域の皆さまが、こうして場所を超えて再びつながり、共に語り合える機会になりましたことに、心から感謝申し上げます。

本日のシンポジウムの趣旨は、これまで第1期、第2期と展開してきた「地域課題解決支援プロジェクト」の歩みを振り返りながら、大学と地域社会の在り方が大きく変化しつつある今、これからどのような連携の姿を描いていけるのか、その展望を皆さまと共に見出していくことにあります。

この間、日本各地の地域社会は、人口減少や少子高齢化、産業構造の変化、自然災害や気候変動への備え、観光・交流人口のあり方など、実に多様で複雑な課題に直面してきました。そうした中で、大学に求められているのは、単にキャンパスの内側で完結する教育・研究ではなく、地域の皆さまとともに課題を共有し、解決策を探りながら、新しい学びを生み出していくことだと、私たちは考えてきました。

地域課題解決支援プロジェクトは、そうした問題意識のもとで始まった取り組みです。第1期・第2期を通じて、松崎町、東伊豆町、そして伊豆半島ジオパークなどをフィールドとして、学生たちが地域の方々と対話しながら、観光やまちづくり、防災、環境、文化・歴史の継承といったテーマに取り組んできました。プロジェクトの過程では、うまくいったこともあれば、思いどおりには進まなかったこと、現場に足を運んだからこそ見えてきた難しさも少なくなかったと思います。しかし、その一つ一つの試行錯誤こそが、学生にとっては「教室では得がたい学び」となり、地域の皆さまにとっても、外からの視点を受け入れ、地域の魅力や課題をあらためて言葉にする機会となってきたのではないのでしょうか。大学と地域が一方通行の「支援する側／される側」という関係ではなく、共に考え、共に悩み、共に創るパートナーであるという感覚が、このプロジェクトを通じて少しずつ育まれてきたように感じています。

本日のプログラムでは、まず阿部先生から、「地域課題解決支援プロジェクトとは何か」という視点で、これまでの取り組みを整理しながらご報告いただきます。続いて、松崎町、東伊豆町、そして伊豆半島ジオパークの関係者の皆さまから、地域の側の視点から見たプロジェクトの意味や変化について、ビデオメッセージも交えながらお話を伺います。大学の報告だけでは見えてこない、現場ならではの実感や、今だからこそ言える本音も含めて、率直に語っていただければと思っております。

さらに後半の全体討議では、当時学生としてプロジェクトに参加していた久保山さん、増田さんにも参加していただき、シンポジウム形式でお話をいただきます。三保、川根といった別のフィールドでの経験もふまえながら、学び手として、そして現在は社会人として、地域と関わる意味や、大学での経験がどのようにつながっているのかを語っていただく予定です。

このように、今日は「大学からの報告」ととどまらず、地域・学生・卒業生、それぞれの立場からの声が交差する場になるよう企画いたしました。過去の成果をただ讃えるだけではなく、うまくいかなかった点や、これからの課題も含めてオープンに共有し、そのうえで「では、これからどうしていくのか？」を一緒に考える。そうした、次の一歩につながる対話の場になればと願っております。

本日のシンポジウムを通じて、皆さまお一人お一人が、地域と大学の関係、そしてご自身の立場からできる関わり方について、あらためて考えていただくきっかけになれば幸いです。そして、この場で生まれたつながりやアイデアが、第3期以降の新たなプロジェクトや、日々の実践へとつながっていくことを大いに期待しております。

結びになりますが、これまでプロジェクトを共に進めてくださった地域の皆さま、学生・卒業生の皆さま、教職員の皆さまに、あらためて深く感謝申し上げます。そして本日ご参加の皆さまには、ぜひ気軽に発言やご質問をいただき、活発な議論にご協力いただければと思います。

本日はどうぞよろしくご厚意申し上げます。

地域連携・課題解決支援の事例報告

報告1 地域課題解決支援プロジェクトとは

阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター特任教授）

大学開放、地域連携の拠点として設置された生涯学習教育研究センターで活動をする中で、地域課題に向き合う契機となったのは、社会教育主事講習と文科省から受託した調査でした。特に後者の調査では、多くの市町村が大学に最も期待しているのが「学生による社会貢献活動の推進」でした。こうした認識の上で、2011年から「地域連携応援プロジェクト」が始動し、学生主体の活動として地域課題解決に取り組むこととなりました。

また、期限を設けず地域からの提案を軸に取り組む事業として2013年から始まったのが「地域課題解決支援プロジェクト」です。

さらに2016年に設置された地域創造学環は、地域での課題解決支援を教育活動に組み入れフィールドワークとして展開し、松崎町や東伊豆町、伊豆半島ジオパーク等では大学・学校・住民・事業者が協働するプラットフォームを形成し、重層的な取り組みとなっています。

戦後の国立大学開設の流れにあって、静岡では県内津々浦々からの半ば強制的な寄付によってようやく静岡大学が設立されました。この経緯を踏まえれば、伊豆半島や中山間地を含む県内全域を対象とした活動を行う責務がありますが、地域課題解決支援プロジェクトはその手がかりとして大きな意義があります。



報告2 地域の視点から

深澤準弥（松崎町長）

松崎町は静岡県で最も人口が少なく、財政規模も小さい自治体です。2014年の「増田レポート」以降、地方創生政策が推進されていますが、自治体単独での課題解決が難しい中、静岡大学から地域課題解決支援プロジェクトの募集があり、町の抱えるいくつかの課題を明確化する良い機会として、応募させていただきました。

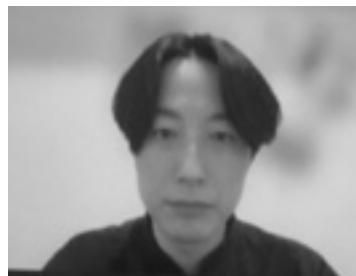
地方の課題は似て非なるものが多く、国などのつくる「成功事例集」はそのまま各地域に適用できるものではなく、課題が生じている理由は深いところでは各地域において異なっています。各地域に根差した解決を図る際には、大学の叡智や学生の力が大きな効果を発揮します。町では地域創造学環のフィールドワークを受け入れるなどの取り組みを行っており、大学との連携を心強く思っています。

今後、伊豆半島南部においては、ますます人口減少・高齢化が進むことが予想されており、地域コミュニティの弱体化も懸念されています。今後、日本全国で人口減少が進むと思われる中で、これからも静岡大学の力を地域に向けていただき、地域の課題解決を人材育成と捉え、地域に関するプロジェクトをますます充実させていただくことが、日本再生の力になると信じています。



荒武優希（合同会社So-an 代表社員）

10年前、学生時代の活動をきっかけに、港町の風情に惚れ込んで東伊豆町に移住しました。現在、東伊豆町を拠点にまちづくり事業等を進めています。東伊豆町の人口は今後20年で約5,000人減少することが予測されています。そうしたなかで、どのように地域の魅力を維持していくか、地域一丸で取り組んでいます。



地域おこし協力隊として活動する中で、静岡大学地域課題解決支援プロジェクトを知り、学生として東伊豆町に入ったかつての自身のよう、静岡大学の学生を受け入れながらまちづくりを進めていくようになりました。こうして地域創造学環の東伊豆町フィールドワークが始まったときには、まだ自身も移り住んで2年目という段階であり、学生と一緒に地域を知りながら、学生の主体的なプロジェクトに支援・助言を行っていきました。

さらに、自身のミッションである空き家を活用した事業に加え、まちなかでの壁画制作、ロゲイニングイベントの開催など、学生たちとの協働に発展していきました。コロナ禍など困難もありましたが、学生の活動は先輩から後輩へと引き継がれ、学生の活動の痕跡が街の各所に残っていることに加え、卒業生の中には東伊豆町に定着し活躍しているメンバーもみられています。

金刺重哉（伊豆市土肥町、伊豆半島ジオパーク推進協議会元事務局長）

伊豆半島ジオパークは伊豆半島の15市町とその周辺海域を包含しており、エリア内には約60万人の人びとが居住しています。ジオパークは地質学が目的であると誤解されがちですが、そうではなく、保全・活用・教育の三本柱のもと、地域住民、行政、ジオガイドと連携しながら行う「活動」が本質です。



そうしたなかで、静岡大学とは連携協定を締結し、ジオガイド養成講座の講師をお願いしているほか、ESD教育や高校生の探究学習支援などの取り組みを協働で進めています。特に静岡大学の学生も参加して開催した「高校生探究サミット」は、高校生にとってあこがれの大学生と接する非常に貴重な機会となりました。

また静岡大学東部サテライトでは地域福祉を専門とする教員のもと、「ジオ福連携」という、国内で初めての取り組みを進めることができます。

さらに、美しい伊豆創造センター所属の専門研究員と静岡大学の研究者とは、定期的な情報交換・研究交流などを行っており、ジオパーク活動の推進においても非常に意義深いものとなっています。

パネルディスカッション

山本——後半のパネルディスカッションにこれから移っていききたいと思います。パネリストの荒武さん、金刺さん、久保山さん、増田さん、そして阿部先生、よろしくお願いいたします。オンラインと対面とのハイブリッドな形でパネルディスカッションを進めていきたいと思いたす。

パネルディスカッションでは、冒頭の趣旨のご説明にもありましたが、第1期、第2期とこの地域課題解決支援プロジェクトが進んできました。久保山さんと増田さんのお二人にはここからご参加いただきますが、お二人とも地域創造学環の卒業生で、こうした地域課題の解決であるとか、フィールドワークで学ばれて、そして今、地域でご活躍をされているお二人になります。自己紹介的なものも兼ねて、少しお話をいただきたいと思いますが、久保山さんからお願いします。

久保山——よろしくお願いいたします。川根本町立三ツ星学園から来ました久保山と申します。私は2017年に地域創造学環の2期生として静岡大学に入学しました。

大学では阿部先生のゼミに所属させていただき、フィールドワークとしては、掛川市にある「とうもんの里」で活動をしてきました。そこは農山村の魅力を次世代につないでいくことを目的に活動している団体で、ネイチャービンゴといって木の実とかを探すビンゴを企画したり、田んぼの中で遊ぼうということで、子供たちを呼ぶきっかけ作りなどを行ってきました。



また、ゼミでは南伊豆町にある伊浜という地域で地元学というものを実践して、かるたづくりを行いました。地元学とは何かといいますと、地域にあるものを探して磨いてまちづくりにしようという取り組みになります。学生がよそ者、つまり風の人としてその地域に赴いて、そこに住む地域の人たち＝土の人と交わることで、地域にある宝物を探していこうということです。実際に4シーズン行ってカルタを作り、実際に使ってみたりしました。

そうしたフィールドワークやゼミの活動を通して、特に私は地域のおじいちゃんやおばあちゃんたちが持つ知恵または技術というものに関心を持つようになりました。例えば、そこら辺にある木の実なんですけど、こうやって食べることができるんだよと教えてくれたり、周りにある竹などで道具を作ったりすることがすごい面白いなって思いました。

それをもっともっと深めたいということで、1年間大学を休学しまして、岡山県の鏡野町という農山村にボランティアに行きました。その活動は、「みどりのふるさと協力隊」という、今の地域おこし協力隊のモデルになったものですが、そちらに行って、例えば酪農を手伝わせていただいたり、ブドウの栽培をやったり、田植えをしたりとか、本当に地に足をつけて1年間活動をさせていただきました。

そうした中で、食べ物と水とエネルギーがあれば何か生きていけるなというふうに気づき、大学に戻ってきてからは就活するのはやめようと考えて、ただ自分が好きなことである農山村、あとは子供たちのことが好きになったので、それを伝えることだけをしていったのです。

そうしたら、たまたま観光で遊びに行った川根本町で、民泊に泊まった時に出会ったおばあちゃんが、僕が仕事を探していると良い意味で勘違いしてくれて、勝手に仕事を探しておいてくださいました。その1年後、探してくれたNPO法人に就職することになりました。そこでは

地域のキャンプ場で働かせていただいたり、おじいちゃんおばあちゃんとのカフェ（サロン）をやったり、あとは放課後児童クラブで働かせていただいたりしました。

また、地元には「徳山の盆踊」という伝統芸能があるのですが、それもすごいやってみたくて。それで結局そのお世話になったおばあちゃんのところ为民泊をやっていたので下宿させていただき、徳山の盆踊で篠笛という横笛をやらせていただいたり、神楽をやらせていただいたりしています。

そんなこんなで3年間過ごしていましたら、教育委員会からお声がかかり、学校で働いてほしいとのことだったので、今は学校に所属しております。川根本町は人口がもう5000人となっております。子どももすごく少なく、小学校と中学校が合併して義務教育学校になっています。こちらは1年生から6年生が終わった後、そのまま続けて7、8、9年生となり、中1、中2、中3という区分がなく、1年生から9年生までの学校になっています。

私はそこで9年生の特別支援学級の担任をしています。通常の一般のクラスとは違って、生活に関わる授業がたくさんあるのですが、その中で私がフィールドワークでやってきたことが学びとして生かされています。

例えば、とうもろのりのフィールドワークでは、自分たちができることとやりたいこと、求められていることを分類して、できることで貢献しようといっていました。今、子どもたちにもまったく同じようなことをやっています。子どもたちに「いま、じゃあ何ができるの？」っていう問いかけをして考えてみたところ、「みんなでカフェをやりたいよ」という話が出てきたのです。でも、その時には「まだ、みんなができることって少ないよね」ということで、実際に地域に出てカフェに行き、そこでコーヒーの淹れ方を教えてもらったり、コーヒー豆を買わせていただいたり、あとは「サツマイモを使ってスイーツを作りたい」と言ったのですが、「サツマイモがないよね」ということで、「実際に地域に出て行ってサツマイモを掘って、お手伝いする代わりにいただく」と言って出ていったりとかして、みんなができることを増やして行って貢献するといったようなことなど、地域と関わりながら自分たちができることとして学校でカフェを開いたりしています。

特別支援なので学力が一般的なクラスとは異なるのですが、例えば、サツマイモの長さを測ろうと言ったら、それで算数の勉強になりますし、カフェを開こうということで、じゃあチラシを作るとなれば文章を書くので国語の勉強になったりします。そういう総合的な学びというものを、今まで私が学ばせていただいたものを活用させていただきながらやっているというような次第になります。

一つだけ最後に申し上げますと、学生時代は特に、失敗する経験というのをたくさんさせていただきました。自分たちも一から企画をしてきましたが、見てくださった方々が本当に我慢して我慢して私たちの失敗を見守ってくださった。手を出さず、口を出さず、ずっと見守って



くださったのですが、その精神が今、教員となってから改めて大事だなと感じています。子供たちが目の前で失敗するなとわかって、それを我慢して見守る。すると子供たちは勝手にそこから必要なことを感じて学んでいくのだということを実感しています。本当にそうやって学生時代の学びが活かされているなということで、感謝を申し上げます。長くなりましたが以上です。

山本——はい、ありがとうございます。それでは、久保山さんのお話に続いて増田さん、お願いします。

増田——増田と申します。よろしくお願ひいたします。肩書が株式会社 Otono となっているかと思いますが、静岡大学で特任職員をやらせていただいていたたり、個人で地域でいろんなことをしていたりするんで、いくつか肩書がございます。

私も学生時代の話からさせていただければと思うのですが、地域課題解決支援プロジェクト自体には、実は高校2年生ぐらいから関わりがございました。もちろん学生として伺っていたわけでもなし、私自身が何かをしていたわけではありませんが、三保の松原フューチャーセンターが手を上げて課題を出していた時期が、ちょうど私がフューチャーセンターでテーマオーナーとして課題を持っていった側の高校生だったという経緯がありました。なので、この場に呼んでいただけたことにはすごくご縁があったなというふうに思っております。

改めて大学時代から自己紹介をさせていただければと思いますが、私も久保山さんと同じく阿部先生のゼミでお世話になっておりました。その学生時代に合同会社を立ち上げて、三保の松原で廃棄されてしまう松の葉っぱを食品に転用するという事業をやっておりました。ただ、そこで商売をしてしまうと父の扶養から外れてしまうので、税金の払いどころに困って合同会社を作るしかないと思い、法人税を払っていたという経緯ですので、社会起業家として何か思いがあったというよりは、自分がやらねばならないと思う商品開発をしていたということです。

そして、3年生の時に卒業論文を頑張って書くぞと思ひまして、参与観察がしたいなと思って三保の住民になってしまおうということに思ひ至りまして、大学3年生の二十歳の時に一人暮らしを始めようと思って三保に移住をし、今も三保に住んでおります。それで、4年生時の卒業論文は、三保の地域の皆さんにご協力をいただいて論文を書いてというような中で生活しておりました。今、社会人5年目の歳になってますが、三保に本社がある株式会社 Otono という会社で、社長と二人で地域の人の声を集めて音声ガイドを作るという事業を三保の中でもやっていますし、全国でも南は九州、北はいま宮城県までですが、地域の方の声を集めて、音声ガイドに乗せて発信をするという事業をしております。これも地域創造学環で、「町の資源っていたる所にあるよね」という視点だったり、東伊豆町で荒武さんの元で学ばせていただく中で出会ったいろんな人の、町の資源を磨き上げてくという学びがすごく生きているなと思っております。

地域課題解決支援プロジェクトの話も、何かこう思ひ出と共に話せたらなと思ひているのですが、冒頭に高校時代に関わっていたという話をしましたが、高校生の時は農業高校に所属しておりました、三保の松原で廃棄される松の葉っぱを食品に転用して商品開発、販売をする



いう研究を高校3年間、ずっとしておりました。その中で、「地域で廃棄されちゃう松の葉っぱを使って商品を作ったは良いけれど、これは本当に地域のためになっているのか？」みたいな視点だったり、私たちが農業高校で勝手に作っているものを町の人たちに知っていただきたいなという思いもあって、当時フューチャーセンターというハコがありましたので、そこに声をかけて地域の人と交流しながら、「私たちが作った商品をどうやって売ったらいいのかな」とか、「どうやったら地域の方のお役に立つのかなということを知りたいです」という形で参画をしておりました。

それで、今回改めて、地域課題解決支援プロジェクトで三保地域がどんな課題を提案して手を挙げていたのかというところを、ここにお呼びいただくにあたって拝見をしておりました。課題番号の21番ですが、三保の松原の保全だったり、三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組み作りをしますよ。あとは生活環境の確保みたいなところを地域課題解決支援プロジェクトで「現在困っていること」として当時、挙げていたとのことでした。これは、今何年か経って、私もどちらかという地域の中でこういった課題に対してアプローチをして、担い手にならなければいけないという歳になってみたときでも、実は同じ課題が地域の中で語られていますし、横の連携みたいな部分の3つめに関しては、私の卒業論文のテーマでもございました。私自身がひしひしと地域の中で感じていた課題は、当時の地域の大人も自覚していたということで、改めて私が地域課題解決支援プロジェクト、そして阿部先生のそばで、それこそ運営もお手伝いをさせていただいたりもしましたが、学生として見ていたのです。もし私が一個人として、大学と地域をどうつなげていけるんだろうということを当時、思い至ることができていたら、もっと上手にこの仕掛けを使えていたんじゃないかな、という反省をしながら実はこの場に座っております。

今後も私は地域に住んでいますし、このプロジェクトも続いていくとは思いますが、フューチャーセンターという団体自体は今、活動が止まってしまっています。実は学生時代、私は静大でフューチャーセンターを運営していた、ディレクションをしていた人間でもあったので、当時、三保の松原フューチャーセンターを復活させてくれないかななどという声もあったのですが、三保地域が私にとってあまりに課題の大きい地域であったので、復活させるみたいなお声かけもすごく丁重にお断りをしたという経緯もありました。

ただ、当時の私に、阿部先生に「復活させたいらしいけど、どうしたらいいですかね」みたいなことを相談しようという頭があったら、また違った未来があったんじゃないかな、などということを実は考えておりました。ですので、学生としてこの地域課題解決支援プロジェクトを中からどう使っていくかというところや、今後というところで、地域として大学をどうやって頼ったらいいのかというところが、個人的には課題に感じているところでございます。私からは以上でございます。ありがとうございました。

山本——ありがとうございます。最後の方で言及いただきましたけど、地域課題解決支援プロジェクトについては毎年報告書を作成してしまっていて、そこにその一連の課題が書いてあります。三保の松原フューチャーセンターは、今お話にあった3つの点、三保松原の保全と魅力を知る、次世代に伝えていく仕組み作り、住民の安全な生活環境の確保というのが困っていること、が課題として出されています。合わせて、大学に期待する支援ということでは、耕作放棄地を活用して三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援が書かれています。また、子供や住民が気軽に参加できるイベントみたいな、地域の関わりを強化するための支援、も書かれています。この辺はどうでしょうか。

増田——この事業自体は、私は直接関わりはありませんが、三保自生の松から植樹用の松を育てるとい事業自体は今、三保ではされています。ただ、ちょっと不勉強で恐縮なのですが、それが静岡大学によるものなのか、行政の努力によるものなのかというところまでは存じ上げていません。イベント開催みたいところは、それこそ私自身もやっていますし、地域の中でもいくつか発足されてはいる印象はあります。ただ、やっぱり横の連携が取れていないので、その連続性だったり、つながりというのは弱いんじゃないかなというのが個人的な所感ではあります。

山本——ありがとうございます。また、増田さんのお話にあった「課題が前から変わっていない」というお話は示唆に富んでいると思います。どうしても、大学と地域がその地域の課題を解決しますよという話になると、解決したかどうかというのが割と取り上げられやすいですが、実際には解決していないことも多いです。そこで、「次の取り組みにつながった」という形でまとめていくのですが、やはりそんな簡単に地域の課題は解決できるものじゃないですね。特に人のつながりなどはもう、常に入れ替わり立ち代わりもあって、どんどん変わっていくみたいなどころもあると思いますので、そういうところで今もアクチュアルに取り組んでいらっしゃるということだったと思います。

次に、金刺さんの伊豆半島ジオパークと、荒武さんの東伊豆からの地域課題解決支援プロジェクトについてみていこうと思います。どちらも第1期の27件の中に入っています。伊豆半島ジオパークは、「伊豆半島ジオパークの取り組みの進捗を判断する評価指標や調査方法が足りない」という課題があって、大学には「その進捗状況を把握したり、フィードバックするのにどのような調査手法が適当なのか、大学の知的・人的資源を生かしたモデル調査の実施や各種資料の収集と分析をやってほしい」というふうに書かれています。これについては、私自身が、かつて伊東に拠点を構えていた伊豆半島ジオパークに依頼されまして、進捗の把握ということで、下田や松崎町など、いろいろなところのスーパーや高校生力を借りながら認知度調査をしました。指標についてはその後、どうでしょうか？

金刺——実は我々の活動の指標というのは、例えば人づくりとかがって何十年もかかることですし、難しいです。ただ、進捗を判断する指標がまったくないことは適当ではないということで、これもユネスコから6年ほど前でしょうか、伊豆半島ジオパークの基本計画と、行動計画・アクションプランを作ってくださいという宿題を頂戴しました。

山本先生にも基本計画の教育関係の活動の本文とアクションプランにも関わっていただきましたが、この点については、我々も市町の関係者や首長さんにも行動計画についてしっかりとご説明した中で、抱えている課題や取り組むべき目標、必ずしも完璧ではございませんけれど



も、取り組んできたつもりです。

山本——ありがとうございます。続いて、荒武さんのいる東伊豆ですが、「地域づくりのインターンとして学生の参加がなくて困ってる」という状況で、大学に対しては「従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と長期的な関わりを求める」というように、当初から書いていらっしやいます。

荒武——そうですね。それこそ私が関わらせてもらうきっかけになったのは、芝浦工業大学の学生たちが主体的に活動しているサークルなのですが、「空き家改修プロジェクト」という学生団体が2014年から東伊豆町で活動をして、今も毎年、街中の空き家を一軒ずつ再生するという取り組みをさせてもらっておりまして、おかげさまで、静大フィールドワークの皆さんと、同時並行で学生が地域で活動しているみたいな状況が作れたりしました。

ただ、いろんな大学が関わってはいるのですが、それぞれの大学が他の大学生たちが何をしているのか把握しないまま活動してるみたいな状況もありましたので、静大フィールドワーク生たちの力を借りて、2020年から、スライドでも少し紹介しましたが「東伊豆学生サミット」といって、毎年4、5大学に登壇いただいて活動報告をしてもらうような場を作らせてもらいました。町としても連携包括協定を様々な大学と結んでいますので、私が移り住んでからこの10年間でも、「だいぶ活発な学生たちの活動が地域で見られるようになったな」という印象は持っている」ということを、地元の方からご評価いただいています。

山本——ありがとうございます。続いて、松崎町の方からも課題を大量に寄せていただいています。動画の中でもありましたが、課題をアピールするいい機会だというお話で、なまこ壁、牛原山遊歩道、防災、少子高齢化、中心市街地のゴーストタウン化、依田邸有効活用、二次交通、ICT、ふるさと納税、大学がないからその産官学の連携した取り組みができないなど、かなり幅広く寄せていただきました。結果的にそれらが地域創造学環のフィールドワークに繋がり、また、「2030松崎プロジェクト」という、町の総合計画につながるような静大と松崎町の取り組みにつながっていきました。実はこの課題解決支援プロジェクトに端を発しているということは改めて確認しておきたいと思います。

他にも、久保山さんのお話にあった南伊豆町も出しています。南伊豆はですね、課題としてはやっぱり「伊豆半島の南端部に位置していて、人口減少と地方経済の縮小が続いていること」が基本的な課題となっており、大学にお願いしたいこととしては「宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップなど、南伊豆ならではの地域資源を生かしたまちづくりをしてほしい」という要望でした。このあたりについて、久保山さんご自身が南伊豆に行かれての感想とか思い出があればお願いします。

久保山——私はゼミで行かせていただいたのですが、先ほども申し上げた通り、地元学のワークショップを行いました。地元学というものが地域にある、すでにもうあるものを探していこうというものなので、その視点からいうと、やはり私たちよそ者、風の人たちが見る世界というのが、やはり地域の人たちと違うからこそ良かったなというのを覚えています。

例えばすごく狭い道路、人しか通れないような坂道があるのですが、そこを軽トラが下ってくるのです。「そこを下っていくの？」みたいなところもあるのですが、でもそれが面白いなと思って写真を撮るのです。それって地元の人からすると、「いや、なんかそんなの当たり前じゃ

ん」みたいなことになったりする。あとは、本当に夕焼けが綺麗なのですが、冬の西風ってすごく強いのです。でもそれが「風強いですね、すごいですね」と話をしていると、「いや、冬風くらいなんか当たり前だ」みたいな話をしてくれるのですが、その強さみたいなものが私たちにとっては魅力に感じる。それを改めて、例えばカルタという方法で何かしら表現というか、形にしていくと、地域の人たちが「これってなんか魅力なんだな」って気づいてくというか、改めて「そうだよね」という話になります。

地域の人たちがそのカルタとかを見て、「ここにこんなものあったよね」などと勝手に会話が始まっていくのを見ると、自分たちが学生というよそ者ができた力だったなと思います。ただ学生が行って、なんか楽しいことをするぐらいのことなのですが。一緒にバーベキューをやったり、美味しいものを食べさせてもらって、「素敵ですね」とか「なんか良かったです」という話をするだけで、地域の方は笑顔になっている。自分たちは何もしてないけれども、学生そのものが持つ存在そのもののパワーだな、というのは感じたりしました。



山本——ありがとうございます。学生に来てほしいという地域のニーズがあるという話も冒頭にありましたが、そういったところがやはり学生、地域が求めているところなんだなと思います。

さて、ここまでは地域課題解決支援プロジェクトとして、地域課題を集めて、それに対して静大が結構応えてきたという論調だったんですけど、ここからは少し課題について取り上げたいと思います。

今後のためにも課題を皆さんに伺いたいと思いますが、静岡大学に対して、もう少しこうしてほしいというところや、あるいは皆さんがそのそれぞれの立場から、静岡大学がどのように地域から見えているのか。身近な存在なのか、何をしているかわからない存在なのか。アプローチしやすいのかしにくいのかなど、その辺を伺いながら地域連携の課題というものを少し考えていきたいと思っています。荒武さんから伺っていきます。

荒武——そうですね。私がメインで関わっていたのは地域創造学環のフィールドワークだったので、限られた回数の中で学生の皆さんは最大限やってくれました。やってくれたと思いますし、なんならそのフィールドワークの授業の前だったり後だったりとか、静岡に帰って大学の中でミーティングするみたいなことも、平日頃やっている、定例会を開いてるみたいに、学生の皆さんが熱量を持って関わってくれておりました。

また、阿部先生にご担当いただいていたのですが、やはりかなり地域側の無理な要望、思いにも本当にご対応いただいていたので、課題意識みたいところは、むしろ地域側がもっとこ

ういうふうにできたらいいな、ああいうふうにできたらいいなみたいな反省はあったりします。ちょっとしたエピソードになりますが、阿部先生におかれましては、なんと還暦のお誕生日のタイミングにご家族との大事なお約束をちょっと無碍にしてですね、我々の活動に学生たちを送っていただいたことがありました。もちろん東伊豆で地元の人や学生たちと盛大に、還暦のお誕生日のケーキを贈らせてもらったりしたのですが。思い出すと心が温まるようなエピソードがたくさん出てくるという点では、本当にもう大変お世話になった活動だったなと思っています。

ただ、ちょっと足が向いていないみたいなのが多分一番の課題なのかなと思います。今回もご参加いただいているいらっしゃる東部サテライトも、拠点が伊豆市にあるという中では、静大さんと絡みを持たせてもらっている立場からすると、もっとうまく使ってもらえるような機会があれば嬉しいとか、そういうことは思ったりしています。まだうまく貢献できるような実力が無いというようなことも思っているのですが、連携させてもらえるような部分があったら、ぜひ可能性を探れたらありがたいなと思っております。

山本——ありがとうございます。ある意味では、属人的な付き合いがどうしても必要で、仕組みや体制だけでは対応できないみたいなのところもありますね。あとはサテライトの話も、うまく連携できるはずなのですが、どっぴりと入る人たちがいる一方で、静岡大学が総合大学で7学部で1万人ぐらいの学生がいる中で、そのうちのすごく限られた人しか、逆に言うが入っていないかもしれない。だからもっと多く入った方が、もっといろいろなことができるという感じもありますか。

荒武——そうですね。先ほどからお伝えさせてもらっているように、多数の大学が伊豆半島に関わっていると思うのですが、やはりそれだけ学生たちの力を求めていますし、受け入れ体制としては手慣れている人たちが多い印象です。やはり「受け入れ慣れ」は大事だと思うのです。そういう人たちも多くいるので、皆さんの受け皿になれたらという思いは、私自身もこの伊豆半島に育ててもらっている人間の一人なので、そういう人が一人でも多く、これから先も生まれてくるといいなと思っています。

山本——ありがとうございます。増田さん、オンラインを介して荒武さんにメッセージはありますか？

増田——ありがとうございます。でも、本当によく遊びに行っているの、改めてだと大変恥ずかしいですが、私も三保の中で社団の理事をしていて、その社団で学生さんを受け入れましようという話をしてしています。私が一番学生に歳が近いからという理由で任されていますが、当時、荒武さんが私たちを受け入れてくださっていたぐらいの年齢に私自身が今なっていて、どうやっていたんだろう、どのように考えて私たちを招き入れてくださっていたんだろうみたいなことを、改めて今度ご相談に伺います。よろしく申し上げます。

荒武——はい、お待ちしております。

山本——増田さんは今、受け入れる立場になって、しかも学環を卒業してるじゃないですか。だからある意味で一番、静岡大学を知っている学生、卒業生ですから、そういう人から見たら、

もちろん静大はすごく頼みやすいフレンドリーな大学なんですか？

増田——それがですね、なんだか卒業してしまうと、改めて大学を頼ろうと思った時に私、特任職員という立場でもあるのでかなり距離が近いのですが、それでもどう大学を頼ったら良いんだらうというのは、やはり難しさを感じる瞬間はあります。もちろん、教え子という立場に甘えて阿部先生に泣きつくということも許してくださるような気はするのですが、お仕事として関わる以上、どういう立ち回りとか、どういう仕立てを持って、きちんとご相談に伺うといのか、みたいなことをどうしても考えてしまうので、そういった部分ではやはり若干のハードルというか、外の人間に自身がなってしまったなと感じる瞬間はあるなと思っております。

山本——そうなんですか。久保山さんもそうなんですか？心のふるさととは静大には？

久保山——心のふるさととして静岡大学は存在しています。ただ、やはり地域に社会人として出てからだと、大学との関係というのはすごい薄くなってしまっているなと思っています。どうやって関わったらいのかかわからないというのと、頼っていいかどうかかわからないみたいなところがあったので、その辺がこちらとしても明確になって、お互いに分かり合えているといいかな、というふうには思いました。

山本——ここで阿部先生に振るのは大変ですが、卒業生にさえ、そういう感じに静大は見えてしまうみたいです。この辺に対する知恵とか工夫はありそうでしょうか。

阿部——これは難しいですね。退職したので少し言えるところがあるのですが、全体的に地域課題解決支援プロジェクトに関わることもフィールドワークのことも、大学生だから大学が、静岡大学が裏にいるから信頼して受け入れてくださるという、そういう利点はたくさんあります。

ただ、その地域の方が、あるいは学生たちがフィールドワークの枠を超えて、もっと参加をしたいとか、地域の方がもっといろんなことを頼みたいとか、学生もそれに応えたいというときに、「そういうこともやったらいいじゃない」という懐の深さみたいなのはさすがにありません。それは安全性であるとか、事業の枠組みの中でやるということである意味当然なのですが、ほかの大学とかいろいろ見ていると、もう少し自由にさせているという部分があって、そういう意味で懐が深かったり、あるいはそのための仕組み、交通費の支援も含めて、そういうものがもっとあったら、地域との連携がうまくいくし、うまくいかない部分の先にまで行けるんじゃないかなと思います。本人たちが頑張ろうと思っているということなので、それを大学としてどんどん拡張しようというような、支えるような仕組みとか態度があるといいかなというふうに思います。

先ほどの最初の発表に、いろいろなプロジェクトの仕組みがプラットフォームになって、例えば東伊豆ではいろいろな大学あるいは高校、東伊豆学生サミットの中には稲取高校も入っていたりしますが、そういうものが動いているときに、静岡大学としては学環のフィールドワークの一環だから守らなきゃいけない枠はあっても、プラットフォームというのは、立場が違うさまざまな人たちが入って交流をしているものです。そこでの成果を持ち寄り、持ち帰るということで非常に成長する場なので、そのようなプラットフォームにむしろ大学が合わせて変化をする部分があったら、大学はもっと成長できるのではないかなと思います。

大学がやっているプラットフォームじゃなくて、大学も関わって、大学自体も成長して拡張するチャンスをプラットフォームの中で得る。そのような仕組みや姿勢で考えると、もう少し制約とか支援とかが変わってくるのではないかという気がして、懐が深い方が信用されるし、いずれ心のふるさともなるのではないかなと思います。

山本——そうですね、いろいろなやり方がある中で、これはいい、これはダメなどとやりすぎると、寛容さのないところになってしまい、ひょっとしたらその寛容さのなさが外から見ると冷たく遠く、距離を感じる位置にもなっているのかもしれないとも思いました。金刺さん、最後に何か、本当に地域の方から静岡大学がどう見えているかというのを、一言教えていただけたらと思います。

金刺——伊豆半島に住む私にとっては、「静岡大学ってちょっと遠い存在かな」と思っていたが、東部サテライトさんが本当に伊豆半島地域の小中学校、高校、それからいろいろな方々に声をかけていただき活動をしていただいたことで、身近な存在となりました。修善寺のまちづくりやESD活動もそうですが、自分で地域課題をしっかりと見つけて行動が起こせる、そういう人づくりのための交流の場ができました。私も参加して感動しましたし、関係機関と連携し、もっともっとつなげていただきたいと思います。

他大学の事例となりますが、つなぐといえば、実は昨年、これもユネスコから地質遺産と文化遺産をうまく連携させた取り組みをという宿題をいただきました。ジオパークと下田白浜神社と三島大社、それから伊豆山神社もそうですが、皆さんジオパークと神社ってピンとくるでしょうか？実は大地の成り立ちと信仰には深いつながりがあります。

2021年に「ジオカフェ」というそれぞれの地域の特産物とか話題をテーマにした参加型のイベントでワークショップをやる中で、國學院大学の先生をお招きして、信仰と伊豆半島の大地には歴史に残る物語があることを知りました。これが新たな「信仰の道」トレイル資源として熱海市の観光部局の全面的な支援をいただき、新しい文化観光振興の施策として取りこんでいただきました。現在も信仰の道（トレイル）として、今回のユネスコ再認定の世界認定の審査でも紹介し評価をいただきました。

ジオパーク活動は広域でなければできないことがたくさんあると思います。その点、この静岡大学では先ほどの東部サテライトをはじめ、例えば農業関係では農学部ですか、そういったところにも連携を取りながら取り組んでいただければと思います。特に環境関係は地球温暖化や気候変動対策は喫緊の課題です。伊豆半島の例えば天城山脈の貴重なブナ林だとか、それから伊豆の駿河湾もだいぶ危機的な状況だと認識していますので、環境問題にも取り組んでいくことも今後のジオパーク活動として重要です。山本先生には引き続きジオパーク活動として取り組む、市民参画による市民が中心となった活動計画、策定作業でお世話になっておりますが、これからも引き続きご協力をお願いしたいというふうに考えております。

山本——ありがとうございます。そうですね、東部サテライトをハブに、さらに浜松キャンパスの先生ももっと積極的にお招きして、ご一緒できたらと思います。

それではちょうど時間がまいりました。改めまして、本日のパネリストの5名の方に拍手をお送りください。ありがとうございました。

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況

■松崎町

□フィールドワーク

松崎町は、地域課題解決支援プロジェクトにおいて最も早くから組織的に関わった地域であるが、2016年からは地域創造学環フィールドワークの受け入れ地となった。フィールドワークは「商店街のにぎわいの創出」「観光と防災の両立」の2テーマで実施され、現在はグローバル共創科学部のコラボラティブワークスとして実施されている。

2025年度は、コラボラティブワークス4（「地域の自然と社会を総合的にとらえるサステナビリティアクション」）が9月27日・28日に松崎町にて、防災をテーマとして、津波避難場所の現状調査を行った。

□2030松崎プロジェクト

静岡大学（未来社会デザイン機構）、松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオパーク推進協議会が連携し2020年末から始めたプロジェクトで、フォーラムやワークショップ、13のゴールに分かれたグループによる活動、松崎高校の探究学習「西豆学」との連動事業、ふるさと絵屏風プロジェクト等が実施され、プロジェクトについては中間報告会、最終報告会等も実施された。

□飛ぶ教室「松崎町防災学習会」

伊豆半島の沿岸地域を含む太平洋側は南海トラフ地震の津波の危険性が指摘されている。伊豆半島の南西に位置する松崎町総務課より依頼を受け、飛ぶ教室「松崎町防災学習会」を開催した。

・2026年2月17日 13:30～15:00

・松崎町環境改善センター文化ホール

- ①「津波被害の想定と対策について」講師：原田賢治（静岡大学防災総合センター准教授）
- ②「自治体未指定の津波避難場所の発生について」講師：吉田さくら（静岡大学地域創造学環4年）

■東伊豆町

東伊豆町における取り組みは、地域課題解決支援プロジェクト（第1期公募）への応募、同地を会場とした公開シンポジウム、東伊豆ガイドツアー等の実施を経て、2017年度後期からフィールドワーク受け入れへとつながった。

・東伊豆学生サミット2026（3月16日、ハイブリッド方式による開催）に学生、教員が参加した。

■南伊豆町

南伊豆町では、第2期公募に対する課題提案をきっかけに地域創造教育センター、大学教育センターの教職員が商店街空き店舗やサテライトオフィスの視察、伊浜地区のまち歩き等を行った。その後、地域創造学環の学生や静大FCのメンバーが南伊豆町で展開する地域活性化の取り組みに参加したり、伊浜地区での地域人材育成事業に参加するなど関係を深めてきた。今年度は、早稲田大学生による「田舎留学プロジェクト」を視察し、本学の今後の取り組みの示唆を得た。

■伊豆半島全域（ジオパーク）

□フィールドワーク

伊豆半島ジオパーク推進協議会からの提案課題は、地域課題解決支援プロジェクト（第1期）のモデル事業に選定され、いくつかの事業が展開した。地域創造学環が開設されてからは、伊豆半島全体をフィールドとするフィールドワークが展開した。

□コラボラティブワークス

グローバル共創科学部が2023年に開設され、コラボラティブワークスという名称のフィールドワークが始まっている。

○地域の自然と社会を総合的に捉えるサステナビリティアクション

・4月12-13日、5月11日、5月31-6月1日、7月6-7日、8月2日、9月27-28日、11月29日、12月13-14日、3月7日

○まちづくりと融合した地域福祉を考える

・5月26日、6月24日、7月22日、8月13日、9月11日、10月16日、11月10日・21日、12月24日、1月15日、2月20日

■御前崎市

課題提案自治体の一つである御前崎市では、2018年度から「御前崎市スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～」をテーマとした地域創造学環フィールドワークが展開した。そこに参加していた元学生を地域創造学環フィールドワーク総括シンポジウムに招聘し、学生時代のフィールドワークの経験について語ってもらった。

■賀茂キャンパス

静岡大学、静岡県立大学、静岡文化芸術大学等、県内大学が賀茂地域で様々な活動を展開できるよう、静岡県・賀茂地域局は2022年1月、下田市に「賀茂キャンパス（賀茂地域大学交流拠点施設）」を開設し、賀茂キャンパス活用推進委員会を実施した。今年度は、リカレント教育事業（2月7日）を共同開催した。

■藤枝市役所

藤枝市都市政策課から「ウォーカービリティ」「地域の活性化・ブランディング」をキーワードにした課題提案があり、委託事業「ウォーカービリティを意識した地域の活性化・ブランディングに関する民俗学的・地理学的研究」を行った。今年度は、2024年度の委託事業をもとに6大学連携共同講座（8月21日）に参加した。

■静岡市西部生涯学習センター

静岡市田町にある西部生涯学習センターから「水害に関する防災教育」「地域防災」に関する課題提案があり、防災講座「水害を知り地域防災を考える 歩いて学ぶ水防災」を行った。

○静岡における近年の気候変動と水害を見据えた防災

・6月1日10:00～11:30

○フィールドワーク 井宮地区を歩く：地図と歴史から防災を読み解く

・6月1日12:30～15:00

地域創造教育センターと地域課題解決支援プロジェクト

静岡大学地域創造教育センター
地域人材育成・プロジェクト部門長
山本 隆太

地域課題解決支援プロジェクトは、地域が抱える課題と本学の学生・教員が持つ研究教育リソースとをマッチングし、地域と大学の協働による課題解決を推進・支援する事業です。県内各地の自治体や団体に対して、大学とともに取り組みたい地域課題を公募し、当センターがヒアリングをした上で課題をリストアップします。その課題に対して関心や研究資源を持つ学生・教員をマッチングし、仲介や派遣を行なっています。初回の課題公募は2013年度末に行い、27件の地域課題を掲載しました。第2期は2016年度以降に公募した16件であり、現在、全44件となっています。

12年前に始まったプロジェクトですが、第1号の成果報告書では「松崎町役場」「伊豆半島ジオパーク推進協議会」からの提案を軸とした、伊豆半島の課題についての成果報告がなされています。これらの課題がきっかけとなり、現在にもつながっている取り組みの一つが地域創造学環・グローバル共創科学部のフィールドワーク／コラボラティブ・ワークスであり、「2030松崎プロジェクト」です。

この間、本部門の位置づけも変わりました。当初はイノベーション社会連携推進機構・地域連携の生涯学習部門でしたが、2017年からは地域創造教育センターの一部門になりました。2020年には、未来社会デザイン機構が設立され、当センターは機構の一員になりました。こうした組織改編を経ながら、地域と大学の連携はますます活発になっています。

地域創造教育センターの役割の一つは地域人材育成に資することですが、その機会は大学開放、生涯学習支援や研修事業で行われる地域人材育成です。地域創造学環はプログラム終了を迎えましたが、新たに社会人の学び直しを進めるリカレント教育を立ち上げつつあります。また、これまで通り、東海地区の社会教育主事講習を教育学部とともに担当していきます。いずれも地域の課題を通じて、大学の学生・教員が地域の人々とともに学ぶことが基本です。

こうした変化の中、地域課題解決支援プロジェクトも新たなフェーズに入ろうとしています。フォーラム・シンポジウムでは、これまでの12年間の取り組みを大学・地域・卒業生の視点から総括するとともに、課題についても明らかにしました。大学も地域も人材が減少していく中では、これまで以上に相互に強いつながりを持つ必要性が指摘され、社会教育士を大学の客員スタッフとして迎えていく案も示されました。人口減少の時代において、大学と地域が新たな形でパートナーになろうとする試みです。

これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

静岡大学
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書 第11号

発行日——2026年3月24日

発行——静岡大学地域創造教育センター

編集——大谷悦子

連絡先——静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門

〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817 E-mail: kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

ウェブサイト——<https://www.lc.shizuoka.ac.jp/>

印刷——大日三協株式会社